
日常が消えたこの世界

松元 淳

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

日常が消えたこの世界

【Zコード】

Z9234X

【作者名】

松元 淳

【あらすじ】

2012年12月22日

日英米で死者甦り人を襲うようになった

日本にいる高校3年の片岡光治はハ王子を舞台に仲間と共に戦いをして逃げる

この作品には一部残酷な描写が描かれています

第1話 始まりなんて大抵どれも同じ様な感じ（前書き）

一部、編集しました

第1話 始まりなんて大抵どれも同じ様な感じ

2012年12月22日

皆は「」の日に見覚えがないだらうか

そうマヤの予言とかいう予言に記されている人類滅亡の日だ

でも、日本では予言を信じてる人は少ないだらう、信じるのはアメリカ人やイギリス人等といった外国人達の方が多いだらう

だから、日本人の多くは忘れているだらう

でもこの時、本当に予言が的中するとは思わなかつた

そう、こういつた事は忘れた時にやって来るから恐ろしい・・・

2012年12月22日

AM : 09 : 30 . . .

俺の名前は”片岡光治”

市立八王子高等学校

クラスは3－Bだが、決して「3ねえーんB組！金ハせんせえーい
！－」じゃないからな

まあ、それはおいといて . . .

今は一時限目が終わって二時限目の授業開始まで時間があるから席でボーッとしている

何故なら . . . 暇だからさ！

「よつ光治」

二人の男女が来た

「何だ、祐介と綾香か・・」

「一人は俺の友人の”佐藤祐介”と”佐々木綾香”だ
二人共、小学校からずっと同じクラスだった
いわゆる”クサレ縁”ってやつだ

「何だつて何よ！」

その「また、くだらない話題か、時代遅れの話題か……」みたいな言い方は

「あのなあ・・・お前らはいつもくだらない事とかしか話さないからだろうが全く、オカルト&・予言&・地球外生命体オタクも大概にしとけよ」

祐介と綾香はオカルトや予言やIFO等と本当に「どうでも良い事をよく話す

ソレはまさに才タケ綴たし嫌と言ひほと聞してきたから
何を話すか予想出来る様になつてしまつた

その為、コイツ等が将来近い内に変なカルト集団を創るんじゃない
かと心配だから、必死にオカルト等から引き剥がそうとしているの
にコイツ等は全く理解してくれない

「うつ！相変わらずの毒舌だな・・・

そんな事より問題です、今日は何の日でしょうか?」

「ヒントは一時期流行つてたやつだよ」

俺は「イイツ等行動が大体分かるから答えがすぐにわかった

「ハア . . . (溜め息)

マヤの予言だつけ?」

俺は溜め息をしてから答えた

「正解!

よくわかつたな

「あん時、お前等に嫌と言うほど聞かされたからな
頭にこびり付いて取れねえんだよ」

「それは災難だつたな光治君」

祐介の野郎

自分でやつといて他人事の様に言いやがつて

「そんな事より、今日は予言の口だから何かが起るよな

「綾香、ソレは人類が滅亡するって事しか無いよな

「そういえばそうだね」

もうダメだ頭が持たない

俺は席を立つた

「どうした?」

「ちよつと廊下の新鮮な空気を吸いに行つてくわ」

俺はフラフラとした足取りで教室を出た

ラジオ体操の深呼吸の様に大きく息を吸い込んだ

「ラジオ体操にしては、時間が遅いし季節も早いんじやない？」

黒髪のロングヘアー女が声を掛けてきた

「ああ、鈴木か

朝から冗談をありがとよ
お陰で少し頭が軽くなつたよ」

「コイツは”鈴木李奈”

俺と同じクラスで剣道部主将で頭も良くてそして美人といつて次元で
良くありそうな女だ

「またあの二人でしょ」

「ああそうだよ」

「相変わらず大変そうね」

「何だ?
心配してくれてるのか?」

「そんな訳ないしょ！」

勘違いしないでよ！何期待してんのよー」

言い忘れていたけど、コイツは”シンチレ”だ

「はいはい、分かった分かった
俺もお前に惚れられるのはゴメンだ」

「そんなのアタシだつて同じよ」

「おーい片岡夫妻、早く席に着けよ」

教室から祐介が呼んで来た
しかも夫妻とか抜かしやがった

「「誰が夫婦だ（よ）！…」」

俺と鈴木は祐介に向かつて怒鳴つてから教室に入つて自分の席に着いた

そして俺は前にいる祐介の耳元で
「テメエ、次あんな事抜かしやがつたらぶち殺す」
と囁いた

「オオ怖い怖い
でもお似合いだと思うぞ」

「私も李奈ちゃんと光治君はお似合いだと思つよ

隣の綾香も賛同してきた

「お前等なあ . . .

そういう変な事を言つて妙な噂が広まつたらどうすんだよ」

「わりい わりい」

「ゴメンね」

「全く」

そして俺は外を見た

俺の席は窓際にあるから暇な時とかはよく外を見ている
此処からは、校庭と校門の辺りがよく見える . . . ん？ アレは . . .

「おい、アレは何だ？」

「「ん？」」

祐介と綾香は外を見た

「光治何言つてんの？」

「どう見たつて、体育の授業中の女子達と黒川先生じゃないか

「違う、校庭じゃなくて校門の方だ」

二人は校庭しか見てなかつたから校門の方に指を指した

「アレは何だ？」

祐介が双眼鏡で校門の方を見ている . . . って双眼鏡！？

「お前！ また双眼鏡を持ってきてるんのかよ！？」

つい最近、校庭で体育の授業受けてる女子を見てて担任の尾崎に警告されたばっかじゃねえか！」

「「うるせえー男が女に興味を持つて何が悪いんだ！」

「お前の場合は、犯罪に近い事してる様なもんなんだよー。何でそんな単純な事も分からんのだ”変態”！！」

「テメエー今”変態”つて言いやがったな！」

「”変態”に”変態”つて言つて何が悪いんだ”変態”！！」

「何回も”変態”つて「うるせーーー」つー。」

祐介と言い争つていると、鈴木が大声で怒鳴り此方に近付いて来た

「アンタ達、何騒いでんのよ・・・。
ちよつとは静かに出来ないの？」

「ほり見ろ、お前の奥さんがつ「黙れ（うつむけ）ーーー」「ゴブ
ツー！」

鈴木と一緒に祐介の顔面を殴つて黙らせた
祐介は倒れてそのまま気絶した

「全く、何でこんな奴とアタシが夫婦に見えるのよ・・・。
それよりも、さっきから何騒いでんのよ・・・。」

鈴木が呆ながら聞いてきた

「ああそりだ、ちょっと外を見てくれ」

「外？」

鈴木はとりあえず窓から外を見た
すると、軽蔑を込めた目で俺を見てきた

「な、何だよその目は」

「・・・・・アンタねえ、校庭にいる女子を見て騒いでたの?
さすがにちょっと退くわ」

「李奈ちゃん・・・

校庭じゃないよ」

「えつ?」

「何でお前も祐介と綾香と同じで校庭しか見ないんだよ・・・

「うつさいわね!
アンタが最初からそういう言わないからでしょ!」

鈴木は再び外を見た

まさか、コイツまで祐介達と同じで校庭しか見ないとはなあ・・・

「ちょっと光治、”変態”の双眼鏡貸して」

「誰が”変態”だ!」

「「「あ、起きた」」

氣絶している祐介は”変態”といふ言葉に反応して起き上がった

「祐介、ちょっと双眼鏡貸して」

「何だ？お前ひょっとして女が好きなのか？」

「そんなわけないでしょ！」

アタシは校門の方を見るだけで、アンタとは違うのよー¹とにかく、さっさと双眼鏡貸してー！」

「分かった分かった、怒るなよ」

鈴木は祐介から双眼鏡を借りて、外を見た

「何か見えたか？」

「ちょっと待つて

綾香ちゃん、ちょっとこれ見て

鈴木が綾香に双眼鏡を渡した

綾香は双眼鏡越しで校門を見た

「凄いよ

校門の前にいる人達、皆ゾンビの様な肌の色してるよ

「綾香、双眼鏡貸してくれ」

俺は綾香に渡された双眼鏡を通して校門を見た

確かに、祐介と綾香と三人で何回かはゾンビ映画を見た事があるか

ら分かる

校門の前にいる人達は灰色の肌をしていた

「アイツ等まるでゾンビじゃねえか」

「何だよ、俺にも見せてくれよ」

「ああ、良いぞ」

俺は祐介に双眼鏡を返した

そして祐介も双眼鏡で外を見た

「アンタ本当に校門の人達見てるの？」

鈴木は祐介が校庭の女子を見てると思っていたようだ

「失敬な！」

ちゃんと校門にいる灰色の肌の奴らを見てるからな

「まあそんな事よりも、アイツ等は何なんだ？」

「そんな事よりつて……（小声で）」

「ハロウインかな？」

「…………いや、違えよ（違つから）（違つわよ）…………」

綾香の言つた事に俺達はつづこんだ
つか、天然にも限度だつてあるからな

「あつー！」

「どうした鈴木？」

「校門の前にいた奴らが入つて來たわ」

鈴木が校門の方に指を指している

校門の方を見ると奴らが入つて來た

「何か嫌な予感がするな・・・」

「確かに、光治の勘は良く当たるからな、ホレッ」

祐介は双眼鏡を俺に渡してきた

そして、双眼鏡越しに奴らを追つた

奴らはフラフラとした足取りで校庭に向かって歩いている
服はボロボロで口の周りは真っ赤になつていて

全くこれじゃ季節外れのハロウインだな、菓子でも貰いに來たのか？

そして黒川は奴らの所に走つて行き、何か話している

すると奴らはいきなり黒川の首に噛み付いた

黒川の断末魔の悲鳴と女子達の悲鳴が混ざつて学校中に響き渡つた
皆が窓によつて来て外を見ている

「な、何だよアレは！？」

「どうなつてるの！？」

「黒川先生が喰われてる！？」

と皆が口々に叫ぶ

放送室にいた教師が食われちまつた
たくつ！ 何が起きてるんだよ！

教師の叫び声がしてから2、3秒経つと、他の奴らは一斉に教室から走つて出ていった

「な、何が起こつてるんだ？」

「 」

「．・ねむイバサヒト」

！
ハカ！早く逃げないとアタシ達も黒川先生みたい喰われるわよ！

動転してた俺達を鈴木が正気に戻してくれた
そうだ、まずは此処から脱出しないと

「そうだな、今すぐ此処から逃げ」 「それは辞めとけ」 つー?

扉の方から声がしたからその方に向くと、扉の前にシャツダラで第三ボタンまで外していてタバコをくわえている男、”坂崎隆一”がいた

要するに不良だ

「隆一」は俺達の方に歩いて来た
隆治が近付いてくると同時に、とてつもない威圧感も俺達に迫って
くる

「隆一」、やつらのはどうじつ事?..」

「言つた通りの事だ

今は辞めた方が良いぞ」

「あら、随分と優しい不良ね」

「つるせえクソ女

鈴木は少し皮肉を込めて言つた

それに対しても隆一は舐めきつた感じで鈴木に汚い言葉をはいた

こんなやり取りが出来るのは一人が幼馴染みだからであつて、他の奴が隆一みたいな事を言つたら即あの世行き決定になつてしまつ

「なあ隆一」、どうこう事か教えてくれないか?..」

「ああ、今校内の階段は自分優先の奴しかいないからな
我先にと逃げようとしてるから全く進めなくて、アイツ等が来る
そして上にいる奴は下にいる奴を落として何処かに逃げるといった
事が学校中で起つてゐるわけだ」

「じゃあ、このまま喰われちつてわけか?..」

「それ違うな祐介

誰も大人しく喰われるとはいつてない」

「じゃあどうするの?」

「戦いながら逃げる」

「隆二、どういう事なの?」

「それは、アイツ等を倒してからだ」

扉から生徒が三人入つて来た
だが、服はボロボロで身体中から血が流れていてその内一人は腸が
見えている

「よしとりあえず倒すぞ、アイツ等は人なんて言える奴らじやねえ
からな」

「じゃあゾンビって事?」

「そうだな

よく分かつてるな佐々木

「隆二…どうやって戦うんだ!?」

「何でもいいから教室に有る物を使え!..」

隆二は俺の机を持つて、中に入ってる物を全部出した

「わかったよ」

俺は近くにある武器になりそうな物を探した
椅子と机しかねえ . . .
とりあえずさつきまで座つてた自分の椅子を持った

「よし行くぞ！

躊躇したら死ぬからな！」

「ああ！」

俺は隆二とゾンビの方へ向かつた

2012年12月22日の今日、予言が現実になつた俺は近くにあ
る武器になりそうな物を探した
椅子と机しかねえ . . .

とりあえずさつきまで座つてた自分の椅子を持った

「よし行くぞ！

躊躇したら死ぬからな！」

「ああ！」

俺は隆二とゾンビの方へ向かつた

2012年12月22日の今日、予言が現実になつて人類滅亡への
カウントダウンが始まった

第1話 始まりなんて大抵どれも同じ様な感じ（後書き）

御意見、御感想等お待ちしています

第2話 ソンビツて何故か物凄い馬鹿力なんだよね（前書き）

一部、編集しました

第2話 ソンビって何故か物凄い馬鹿力なんだよね

「オラアツ！」

ゴシャツ！

隆一はゾンビの頭に机の足を叩き付けると頭蓋骨が砕けてその場に倒れた。

俺も続いて椅子の足でゾンビの顔を殴った。

グシャツ！

という気持ち悪い音と感覚が身体中に響いた。

俺が一体倒した時に隆一は残りのゾンビを倒していた。

「ふう、まあこんな所か」

「やれやれ、周りの物を使って戦うなんてまるで”龍が如く”の様だな」

とりあえず俺と隆一は一息ついた。

でも、いつまでも休んでるわけにはいかない。

「確かに良い例えだが、先を急いだ方が良いな」

「そうだな、三人共行くぞ」

「おつ」

「OK」

「ねえ、ちょっと寄つてほしい場所があるんだけど」

「……ん？」

場所は変わつて剣道場

鈴木が何か取りに行きたないと言つたから此処に来ている。

「お待たせ」

鈴木が戻つて来た

そして手には・・・木刀だと…?似合ひ過ぎる

「な、何だその木刀は?」

「なによ、アタシが木刀使つちゃ悪いの?」

「いや、そういう訳じゃないんだが」「

「ズルイよ!一人だけそんな強い武器使つてさ!」

祐介が鈴木の木刀にけちつけている

「しようがないじゃない!」

これ一本しか無いし、この中じゃアタシが一番こいつゆう物に使い馴れているんだから!」

「確かに、李奈は剣道部だからこいついった物を持ってた方が良い」

「諦める祐介」

俺は隆一に賛同した。

「諦めらつて、俺は使いたいわけじゃねえよ」

「そんな事よりも、早く学校を出よ！」

「隆一の言つ通りだけど、武器が余りにも貧弱すぎるよな」

現在の武器

- ・机 × 1
- ・椅子 × 1
- ・木刀 × 1

「確かに、此処から出る前に強い武器を増やしたいんだが良いところを知ってる」

「隆一君、本当に？」

「ああ、アレなら佐々木も祐介も扱えるな」

「つて事はそれまでは俺と綾香は丸腰か？」

「普通に考えてそつね」

「李奈ちゃん、絶対守つてよ」

「大丈夫よ、心配しないで」

とつあえず綾香は大丈夫だわ。さて、祐介はどうするかな。

「光治頼んだぞ！」

「ああ、お前はゾンビの餌係だから心配すんな

「やつやつ事言うなよ！」

「光治、祐介行くぞ」「わりい、ほら行くぞ」「……祐介」

「お前今、餌つて言おうとしただろー。」

俺は祐介が言つてる事を無視しながら隆一についていった。

「といひで、何処に向かつてんだ？」

「部室の鍵を取りに行くんだ」

はい、今までだいたい分かつてしましました。
それにしても、さつきから何か聞こえる様な……

「やつぱりバットかー？」

「まあ、そんな所だ。良く分かつたな」

祐介も気付いたか。

まあ、気付かない方がおかしいよな。

「何で分かつたの？祐介君つてもしかして、エスパー？」

「綾香、普通は誰でも分かるからな」

「ええ…？ そうなの？」

「ゴメン綾香。分からぬ奴はおかしいと思つた俺を許してくれ。

「ねえ、何か聞こえない？」

「急にどうしたんだ李奈？ 聞こえるのは、ゾンビのお決まりの呻き声と悲鳴くらいだが」

確かに隆一の言つ通りでゾンビ達の呻き声と生存者達の悲鳴が聞こえるけど、それ以外にも何か聞こえる。

「確かに何か聞こえるな」

「光治も聞こえるの？」

「ああ、僅かにだけどな」

「それよりも先を急いで。アイツ等もお出ましの様だからな

隆一の向いてる方を見ると、5体のゾンビが此方に歩いて来てる。

「じゃあ早く部屋の鍵を取りに行こうか

「いや、それも無理そうだな」

死体と残骸が散乱してる階段を降りようとしたら、隆一に止められ

た。

「どうゆうつ事だ？」

「ああゆうつ事だよ」

「は？ どうなってんだよ・・・」

そこには信じられない光景が写っていた。

階段にあるつらさつきまで死んでいた人が起き上がっている。

「とりあえず上に行くぞ。みんな走れ」

隆一に言われた通りに俺達は一斉に上の階へと向かった。下ほモビ
やないが、やっぱり死体や残骸が転がっている。

「うおっ！？」

いきなり何か足を掴まれた。

俺の隣に倒れていた死体が甦つたらしく、俺の足にかぶつつ
している。

「――光治（光治君）――」

「クソツ！ 離れやがれ！」

俺はゾンビの頭を何度も蹴り続けるが、全く動じない。

それに、何て馬鹿力何だコイツ！

ゾンビが俺の足に噛み付こうとした瞬間

と音がして、ゾンビは動かなくなつた。
そして隣には木刀を持った鈴木がいた。

「ほら、早く行くわよバカ！」

「あ、ああ」

俺は足を掻んでいた死体を下の階に向けて蹴つてから、五階へと向かつた。

五階は所々に血が飛び散つているけど、ゾンビも人の姿も見えない。
でもさつきからかすかに何かの音楽が聞こえる

「何だここの音は？」

「何かの音楽の様ね」

「吹奏楽部の部室から聞こえてくるな」

「光治何か心当たりないの？」

「鈴木、何故俺に聞いてくるんだ・・・」

「だつて、アンタの周りには”変な奴”が多いじゃない

「それは俺が”変な奴”ばつかとつるんでる”変な奴”って言いたいのか？」

「別にそういう意味で言つた訳じゃないわよー。」

「痴話喧嘩はよじてくれないか？」

「のままだと、ヒートアップしたのか隆一が間にはこつた。

つか、痴話喧嘩って . . .

「ちょっと隆一。今の話に方だと、アタシと光治が夫婦みたいな言い方じゃない。」

「そんなのビツでも良いだろ。」

「アンタねえ、自分で今の状況を作つとこでそれは無いでしょ。」

「ああ、それは悪かつたけど、アイツ等に喰われる前に音がする所に行つてみよつ

会話は移動しながらでも出来るからな」

確かに、階段には無数のゾンビが俺達との距離を少しづつ詰めていた

俺達は吹奏楽部室がある左の方に向かつて走った。

「やうだな。急いづ

「何だ綾香？」

「ねえ隆一君」

「音はゾンビ達を引き寄せるんだよ。何で音楽が聞こえてくる所に行くの？」

「生存者がいるかもしないからだ」

「それは、助けるって事なの？」

「ああ」

「でも隆一、それはかなり危険じゃないのか？」

「確かに危険だが、逃げ道が無いから仕方ない」

後ろにはゾンビが俺達を追つて来てるから後戻りは出来ない

「なら、右に行けばよかつたんだよ」

「それは甘いな祐介。もし、右に行つたとしても今と同じ様になる
だろうな」

「何か根拠があるのかよ」

「ああ、ゾンビ共は必ず全ての階にいるからな、教室に行く前は何度もゾンビに出会つたからな」

「じゃあ、俺と隆一が初めて倒したゾンビは

「恐らく、追い掛けて来たんだろう」

「なるほどな」

「よし着いたぞ」

何だかんだ話してるとあつといつ間に吹奏楽部室前に着いた。
幸いにもゾンビはいなかつた。

『 California rest in peace
Simultaneous release . . .
』

さつきから聞こえたのはこの曲か . . .

「此處で間違いないな」

「これってロックよね？」

「しかも海外のね」

「これは . . 映画版『 ノート の主題歌だよな」

海外のロックに聞き覚えのあるこの曲 . . .

「まさか！」

「どうしたの光治！？」

「祐介と綾香は誰だか分かるよな。」海外のロック”とこの曲で予想はつくだろ」

「「「うん」」

俺達三人は普通に分かるが、隆一と鈴木は首をかしげている。

「間違いない、アイツだ . . . 」

「音楽室にいる奴が誰か分かるのか？」

隆一が聞いてきた。

”海外のロック”から連想できる奴はアイツだけだから分かる。

「ああ」

「やつぱりアンタの知り合いじゃない」

「まさか、本当にアイツだったとはなあ . . . 」

「お前の知り合いつて事は中に入れてくれるかもしれないのか？」

「多分な」

俺は扉前まで来て取つ手を掴んで開けようとしたが開かない。
そして音楽が急に止まった

「どうだ？」

「中から鍵が掛けられてる」

「なら、名前を呼べばいいじゃない」

「今やるよ。

おい吉彦、開けてくれ」

海外ロック好きの”アイツ”の名前を呼んだ。

「その声は光治か！？」

扉の向こうから男の声、つまり吉彦の声が聞こえてきた。

「ああ」

「お前一人だけか？」

「いや、俺以外に四人いる」

「誰も噛まれてないな！？」

「は？ 何言つてんだ？」

吉彦はいきなり意味不明な質問をしてきた。

「今言つた通りだ。誰もアイツ等に噛まれていはないな？」

「ちょっと待つてる」

俺はみんなの方に向いた。

「どうだつた？」

隆二が聞いてくる。

「よく分からぬ質問をされたよ。『誰もゾンビに噛まれてないか？』ってな」

「どう言つ意味だ？」

「さあな、勿論誰も噛まれてないよな？」

「当たり前でしょ」

「大丈夫だ」

「噛まれてないけど」

「大丈夫だよ」

鈴木、隆一、祐介、綾香の順で噛まれてないと答えた

「そりか・・・つてヤバイ！アイツ等がもつそこまで来てるぞ！」

後ろからゾンビ達が近付いて来ていて、あと数秒で俺達に追い付く距離になっていた。

俺は扉まで駆け寄った。

「誰も噛まれてない！噛まれてないから早く開けろ！アイツ等がすぐそこまで来てる！」

俺は扉に向回も椅子を叩き付けながら叫んだ。

「分かった！今開ける」

「早くしろー！」

俺は大声で叫んだ。

その後ろでは隆一が机を、鈴木が木刀で次々にゾンビを倒しているが、その後ろでは他のゾンビが少しづつ近付いて来ていた。

「おい！早くしないとブツ殺すぞ！…」

俺は怒鳴りながら鉄の部分が所々ひしゃげた椅子で扉を叩きまくった。

力チャツ

鍵が開いた音がして扉が開き、そこから吉彦が顔を出した。

「早く入れ！」

「遅えよクソ野郎」

「バリケードを張つていたんだよ

「まあいい、みんな！早く入れ！」

俺がみんなを呼ぶと、皆は扉に駆け寄つて来た

「早く！早く入れ！」

俺達が中に入ると吉彦は急いで扉を閉めた。

扉の向こう側では、無数のゾンビが扉を叩いている音が聞こえる。

「助かつたよ吉彦」

俺は再び即席のバリケードを張つている吉彦に礼を言った。

「ああ、良いって事よ。疲れただる？そいら辺でくつろいでてくれ」

「もうさせてもいいよ」

俺はひしゃげた椅子をその辺に置いてから部屋の真ん中まで歩いていき、そこで座った。室内には祐介や綾香達の他に男が2人、女が1人の計3人の男女がいる。見覚えの無い顔だから、恐らく後輩だろう。

それにしても、さっき椅子で叩きまくりながら怒鳴り散らしていたせいか、怯えている。

隆一はポケットからタバコとライターを取り出して、タバコに火を付けて吸っていて、祐介達は窓の付近で座っている。

即席バリケードを張り終えた吉彦が此方に近付いて来た

「しかし、剣道部の鈴木に此処等一体で最強の不良の隆一がいると
はな。お前は運が良いな」

「まあな」

「さてと、これからどうする？？」

「そうだな・・・よし！決めた」

「何をだ？」

「なあ吉彦、皆を集めてくれ」

第2話 ソンビツて何故か物凄い馬鹿力なんだよね（後書き）

御意見、御感想等お待ちしています

第3話 自己紹介ーそれから・・・武器を集めよー! (前書き)

何か色々と変になっていたので直しました。
すいませんでした

第3話 自己紹介！それから・・・武器を集めよー！

今、吹奏楽部室の中央には皆が集まっている。

「なあ光治、皆を真ん中に集めたけどこれから何するんだ？」

吉彦が聞いてきた。

何でこの後の展開が分からないんだ？

「何つて、今後どうするかの会議に決まってるだろ。何で分からな
いんだ？」

「うるせえーそんなのどうでも良いだろー！」

俺が何で分からぬいか聞くと吉彦は何故かキレた。

「なあ、これから何するんだ？」

祐介が聞いてきた。

まあ祐介なら分からぬのが普通だから俺は気にしない。

「俺達は、これから共に行動するんだ。

だから皆にはこれから自己紹介をしてもらおうと思つてゐる。皆はど
う思つて？」

俺は皆の前に立つて、中央に集めた理由を話した。とは言つても、
理由はあともう一つあるけど。

「確かにそうね。お互いの事を知らないと、この先何かしらの支障

がでると思つわ

「李奈の言つ通り、この先何かしらの支障をださない為にも互いを知つた方が良いだろ?」「

隆一と鈴木は自己紹介に賛成した。

「他は?」

俺は残りの六人に聞いてみた。

「俺は別に良いぜ」

「私も良いよ」

「別に構わないぞ」

祐介、綾香、吉彦も賛成した。あとの三人も喋りはしなかつたけど、頷いた。

「じゃあ、まずは俺からだな。

俺は片岡光治、クラスは3年B組だ。ゾンビが現れた時は教室にて、そつから綾香や隆一等と此処に逃げて来たんだ。よろしくな

俺は知らない3人に自己紹介をした。

「じゃあ、次は祐介だ」

「オッケー」

俺は祐介がいた所に座つて、祐介は俺がいた所に移動した。

「俺は佐藤祐介、光治と同じクラスの3年B組だ。ゾンビが現れた時は教室にて、そつから光治達と一緒に此処に来たんだ。まあよろしくな」

「ちなみにコイツはゾンビの囮役だ」

「やうやう事言つねー。」

軽い（？）冗談を言つたら、祐介がツツ「ンできた。

「冗談だよ。

次は綾香の番だな」

「えー？ わ、私があ・・・緊張するなあ・・・」

綾香はそつ言いながら、前に立つた。

「わ、私は、佐々木・・・綾香・・・です。

ク、クラスは・・・光治君と祐介君と・・・同じ3年B組・・・です。ゾンビが、現れた時は・・・教室に・・・いて・・・そこから光治君や隆二君に李奈ちゃん・・・とい、一緒に此処に来ま・・・した。
よ・・・よろしくお願ひします！」

綾香は緊張しながらも何とか自己紹介を終えて、お辞儀をした。
しかし綾香の奴、あんな秘密兵器を隠してやがったのか・・・
つい、カワいいと思つてしまつた。

「次は鈴木の番だ」

「分かってるわよ、そんな事」

鈴木はそう言って前に立つた。それにしても、相変わらずシンシンしてやがるな。

「鈴木李奈よ。

剣道部主将でクラスはある”バカ”と同じ3年B組でゾンビが発生した時は教室にいて”バカ”達と一緒に此処に来たわよろしくね。」

自己紹介で”バカ”って言った時だけ目線が何故か俺の方を向いていた。
まさか”バカ”って俺の事か！？

「隆一の番だぞ」

「ああ

隆一はタバコをくわえたまんまで前に立つた

「坂崎隆一だ。”フー”

クラスは3年C組で”フー”、ゾンビが現れた時は学校の屋上で寝てて、そこからアイツ等と合流して此処に来た。よろしく、”フー”（”フー”の所はタバコの煙を吐いている）

アイツ寝てたんだ．．．

つか、タバコ吸いながら自己紹介するなよ．．．

「じゃあ次は、吉彦か」

「そうだな」

吉彦は前に立つた。

そういうえば、コイツは自己紹介の時、色々と面倒なんだよなあ・・・
適当な所で終わらせるか。

「田中吉彦だ。

クラスは隆一と同じ3年C組でゾンビが現れた時は教室について、そこから此処に逃げて来たんだ。

ちなみに、俺が好きなバンド「お前が”レッ リ”大好きなのは、
充分分かつてるからそこから先は言わなくていいぞ」なつ！？」

やつぱりこいつなつた。

1年の時も自己紹介が長くて担任に強制終了させられてたなあ・・・
吉彦は、”レッ・リ・リペッーズ”というバンドが大好きで、その中でもベース担当の”フー”とかいう奴に憧れてるそ
うだ。

「おこー何で自己紹介の途中で終わらせるんだよーーー！」

「テメエが自己紹介する度に”レッ リ”の事を話だして長くなる
からに決まつてんだるーーー！」

吉彦が怒鳴ってきたから、俺は吉彦に怒鳴り返した。

「ちよつヒーーアンタ達が怒鳴るからあの子達が怯えてるじゃないーーー！」

「あ・ああ、すまない。」

「全ぐ、」の先の事に何かしらの支障が出たらどうすんなよ

「おやおや、妻の尻に敷かれて」「だから夫婦じゃねえー（じやないわよー）」「ゴブアツ！…」

吉彦が調子に乗った為、鈴木がアイツの腹を蹴つて、俺は顔面に右ストレートをおみまいすると、吉彦は少し吹っ飛んでそのまま気絶した。

「何で、俺がこんな女と夫婦なんだ（私がこんなのと夫婦なのよ）…あ…あ…！」

俺と鈴木はあの3人の方に向いた。

ああ、やつぱりな…メツチャビビッてるよ…今近付いたら、

パニックに陥るかもな…

「なあ綾香、頼みがあるんだが

「何？」

「俺の代わりに進めてくれないか？」

「どうして？」

「何でつてなあ…

吹奏楽部前では扉を椅子で叩きながら怒鳴つて、室内じゅ、吉彦と怒鳴りあつた上に、殴つて氣絶させちまつたからアイツ等の危険順位が

2・鈴木
3・ゾンビ
4・隆二
5・吉彦

つて感じになつてゐると思つんだ。だから今俺が話し掛けてもなあ・・・」

「分かつた、私に任せて」

綾香はそう言つて胸を叩いた。

「すまない、助かるよ」

「良いよ、気にしないで」

俺が申し訳なさそうにそう言つと綾香は笑顔でそう答えた。

「あ、ああ・・・」

俺はつい顔をそらしてしまつた。

やべえ・・・あの自己紹介のせいで、アイツが笑顔になつただけで「カワイイ」って勝手に認識してやがる。目を覚ませー目を覚ますんだ俺!!

「大丈夫? 何か顔赤いよ」

「だつ、大丈夫だ。

そ、それより頼んだぞ」

綾香が心配した様子で聞いてきたから、俺は慌てて答えた。

「任せとこ！」

綾香はそつ答えてウインクをした。

（やめりおおおおお！…）

精神が不安定な時にそういう事すんじゃねえええ！…）

俺は心の中で叫んだ。

「ねえ！

自己紹介、次は君達の番だよ。教えてよ君達の名前とクラスとゾンビが現れた時に何処にいたか教えてよ

綾香は怯えてる3人を呼んだ。

すると3人は俺達に聞こえない位の声で話し合いを始めた。

「全く、アンタが怖がらせたからよ」

「いや、正確には俺とお前が怖がらせたんだからな。そこんどこち
れんなよ」

俺は鈴木が言つた事の間違いを訂正した。

「それは、アンタがあの”変人”の自己紹介を強制終了させたから
でしょ！違つ？」

「あのな、吉彦の自己紹介を放置してると二、三時間位”レッ リ
”の事を話続けるんだぞ。お前はそれを耐えられるか？」「

「それは、さすがに無理ね。止めて正解だつたわね」

鈴木が氣絶してる吉彦に指を指しながら理不尽な事を言つてきたから、俺は吉彦の自己紹介を強制終了した理由を説明すると納得してくれた。

「おいそこの”夫婦”、あの三人が待ってるぞ」

隆二が今さっきまで怯えて三人が”話していいですか？”オーラ全開でこつち見て待つてる事を教えてくれた・・・つて今、”夫婦”つて言いやがつたな。

「「だから、夫婦じゃねえ（じゃないわよ）・・・」「

と俺と鈴木は隆二に同じタイミングで同じ事を言つた。

「そんな事より、アイツ等待つてんぞ」

隆二は三人の方に指を指しながらそう言つた。

「悪かつたな。自己紹介してくれ

俺がそう言つと三人は一瞬ビクッとしてから

「「「は・・・はい・・・・・」」

と言つた。

そして三人の中の内、一人の男が前に出た。

「ぼ、僕は…宮本…幸助です…。クラスは…1年A組で…ゾンビが現れた時は…教室にいて、そこから…一人で此処に逃げて…きました。よろしくお願ひします…」

幸助と名乗った男は怯えた様子で自己紹介をした。やつぱり、短時間で沢山の恐怖を体験したからなあ…。次は幸助とは違う男が前に出た。

「安岡光太です…。

クラスは2年A組で…ゾンビが現れた時は…教室にいて、そこから彼女と此処に逃げてきました。よ、よろしくお願ひます」

光太と名乗った男が後ろにいる女を指しながら自己紹介をした。この光太って奴は、さっきの幸助ほど、怯えてはいないな。

さてと、あと一人は…めっちゃモジモジしてるよ、大丈夫なのか？

すると、その娘は光太の隣に移動してから耳元で何か囁いている。それが終わると光太が口を開いた。

「彼女は古林葵です。僕の彼女でクラスは僕と同じ2年A組でゾンビが現れた時は教室にいて、そこから此処に逃げてきました。」

が光太が代わりに彼女の自己紹介をした。しかもリア充かよ、爆発しゃがれ！…と言いたい所だが、今はそんな事言つてられない程の事態だから我慢しよう。

「なあ光治、これからどうすんだ？」

と祐介が聞いてきた。

確かに、この先どうするかな・・・

吉彦が気絶してるから作戦会議は無理だからなあ　・　・　・　そうだ。

「そりだな・・・・とりあえず武器になりそうな物でも探すか」

と俺は祐介の質問に答えた。

人數が多くなったから、武器が少ないと半分位に洞る可能性があるから今はとりあえず武器になりそうな物を探すか。

「じゃあ」だから、皿で武器にならうつた物を探すぞ。いいな?」

କଣ୍ଠ (ଶରୀର) (ପାଦ) - କଣ୍ଠ (ଶରୀର) (ପାଦ)

俺の問いかけに気絶している吉彦を除く全員が返事をした。

十分後

「まあ、こんなもんかな」

と俺は言った。

此処にある全ての物を”10”として、武器になりそうな物は”0分の1か2”位だが、それでも良い収穫だ。

収穫は

机
・
・
・
沢

桔子

といつた所だ。

「で、どれを持つていくんだ？」

「そうだな……ギターは机や椅子より壊れやすいけど使いやす
いから3つ位は持つていいかな」

隆一が聞いてきたから俺はそう答えた。

「じゃあ、机と椅子はどうすんだ？」

今度は祐介が聞いてきた。

「適当に分けるよ

と俺は面倒くさいから適当に答えた。

「おーおー……適当だな

「机と椅子なんて学校中に沢山あるからどうだつてこいだろ

「まあ、確かにそうだけど……」

「うう……うう……」

俺と祐介がどうでも良いやり取りをしてると、吉彦が目を覚ました。
つか、気絶から覚めるの早いだろ。

「うう……此処は？……つか、何で鼻が痛いんだ？」

吉彦は自分が気絶する前の事を覚えてないのか?
まあ、それはそれで俺にとっては都合が良いけど……

「あー、そうだ。光治テメエ！よくも俺の顔面殴りやがったなー！それに、鈴木も俺の腹を蹴りやがつて！」

やつぱり覚えてたか……さすがに、そう都合良いいかなによ。

「アレは、俺と鈴木の前で”禁句”を言つたお前が悪い」

「そ、う、よ、アンタがアタシと光治の事を、ふつ、ふつ、夫・婦つて言つたのが悪いのよ」

俺が言つた事に鈴木も賛同した。

”夫婦”って所は別に無理して言わなくとも良いと思つが……

「それは、お前が俺の自己紹介を強制終了したから、俺が”禁句”を言つはめになつたんだろうが」

吉彦はあまりにも理不尽な事を言つてきた。

「結局、ハつ当たりかよ

「最低ね」

俺と鈴木は吉彦に冷たい視線を浴びせた。

「それよりも、今何やつてんだ？」

と吉彦はいきなり話題を変えてきた。

どんな事を言われても”知るかボケ！”つて訳かよ、まあ吉彦らしいな。

「今は武器を集め終えた所だ

俺は吉彦の質問に答えた

「武器つて・・・机と椅子ばかりだな、それとギターが少しつて、大丈夫なのか?」

「知らねえよ!」

俺は吉彦が言つた事に若干苛ついた。
この野郎、今度は氣絶じやなくて殺してやるつか?

「俺には、そんなギターよりも強力な・・・つて、何で俺のベース
が他のギターと一緒に置いてあるんだ!?」

「だつて、武器になりそうな物は真ん中に置いてくれと言つたんだ
が、聞いてなかつたのか?」

「聞ける訳ねえだろ!」

「氣絶してたんだぞ。そんな分かりきつた事を聞くんじゃねえよ!」

「アンタ達、それはどうでも良いから作戦会議しましょうよ!」

鈴木は長引くと思つたのか、俺と吉彦のやり取りの間に入つて止めた。

「せうだな、じゃあこれから作戦会議を始めるぞ!」

俺は皆に聞こえる様にそう言つた。

第3話 自己紹介！それから・・・武器を集めよつ！（後書き）

御意見、御感想等お待ちしています

第4話 作戦会議！そして作戦決行！（前書き）

色々な事で遅れました

第4話 作戦会議！そして作戦決行！

「じゃあこれから作戦会議を始めるぞ」

俺は既に聞こえる様に言った。

「作戦会議？」

吉彦が首をかしげた。

「まあ、作戦と云つよつて、どうやら学校から脱出するかだけだな」

「何でそんな面倒くさい事をしなきゃいけないんだ」

吉彦が面倒くさいとか言いやがった。

「じゃあお前は、あのバリケードを外して扉を開けて、わざわざ外にこるゾンビに自分の肉を捧げるのか？」

俺は即席のバリケードが張られている扉を指しながら、吉彦に皮肉を込めるながらそう言った。

「うーん、それは・・・」

「ほらな、やっぱ何も考えていない。お前みたいな奴や誰も死なせない為に作戦会議をするんだ。分かったな？」

「あ、ああ」

俺は何も分かっていない吉彦に作戦会議をする理由を説明すると、吉彦は頷いた。

「会議の議題は「**“ひりせつ**て学校から脱出するか」だ

俺は作戦会議の議題を発表した。

「なあ、どうやつてこの学校から脱出するんだ?」

「それを、これから話し合つんだ。つか、何でお前は人の話を聞かないんだよ . . .」

人の話を聞かない”アホ”の祐介の質問に俺は呆れながら答えた。

「じゃあ早くやひづめ

と祐介が言った。

何だよその態度は、何様だよお前は . . .

「まあいい、じゃあこれから、”**ひりせつ**て学校から脱出するか”的案を出してくれ。案を出す時は手を挙げてからこじしてくれ」

俺は眞面目にさづ言った。

すると吉彦が手を挙げた。

「扉が駄目なら、窓から出れば良いこと思つんだナビ」

吉彦は案を出した。

「なるほどな。で、詳細は？」

俺は吉彦の出した案の詳細を聞いてみた。
何故なら、脱出するのだから詳しい詳細を聞かないと色々と危険な
事になるかもしないからだ。

詳細があまりにも無謀すぎるのも困るのも理由の一つだ。
例えるなら、いきなり「バ オハ ード？ ミ ニ・ジヨ ピ チの
様に建物の壁をかけ降りろ」と言われた様なものだ。

あの技は俳優でさえ難易度が非常に高いだろう。それを俺達高校生
が出来ると思うか？勿論無理だ。そうゆうアホみたいな案を出され
ては困るから俺は詳細を聞くんだ。

詳細があまりにも無謀過ぎる内容だったり、俺は即却下する。

「其処にあるカーテンをロープ代わりにして下の階に降りるんだ。
確か下はコンピュータールームだったから色々と情報を集められる
からな」

と吉彦はカーテンを指しながら、自分が出した案の詳細を話した。

「おお、吉彦にしてはまともな案が出たな」

俺は意外とまともな案を出した吉彦に驚いた。

「お前は一体俺をじう見てるんだ？」

「そんなの、レッ リ大好きで出来もしない事を出来ると信じてる
空想野郎だろ？」

カーテンを使って校舎の壁をかけ降りるとかいうバカげた案だと思

つたんだけどなあ . . . 「

「ぐ、空想・野郎 . . . 「

俺は吉彦のイメージを壊つとアイツはひどく落ち込んでいた。

「アンタって、さうげなく最低な事壊つたんだよね」

「じょうがねえよ。光治は毒舌だからな」

「光治君って中一の時から毒舌になつたんだよね」

鈴木が俺に軽蔑の視線を浴びせながら壊つと祐介と綾香も賛同した。
さすがに、これだけは自分も否定出来ない事だ。

「吉彦、やつるのは悪かった。」

「あ、ああ気にすんな」

俺が謝ると吉彦は許してくれたけど . . . 物凄い落ち込んでいる。

「じゃあ会議の続きをやるぞ」

俺は会議を続ける事にした。何故なら吉彦を立ち直らせる事も大事
だけどそれは会議が終わつた後でも出来るから俺は会議を進める。

「じゃあ、カーテンを利用して下の階のコンピュータールームに行
くという案に対して何か不満がある奴はいるか?」

俺が皆に聞くと、鈴木が手を挙げた。

「なんだ？」

「確かにカーテンで下の階に行くのは良い案だけど、下に行くときは武器が持てない筈よ、下に行つた人はどうやって武器を受け取るの？それにもしも中にゾンビが居たらどうするの？」

確かに鈴木の言つ事は納得出来る、下の階に行けても武器を受け取る方法が無ければ丸腰で脱出しないといけないし中にゾンビがいたら武器を受け取る前に食い殺されるだろう。

「じゃあお前が最初に行く事になるな」

「ええっ！？な、何でアタシが最初に行かないといけないの！？」

俺がそう言つと鈴木は驚きながら聞いてきた。

「だつてお前は木刀を持つていて、ソレを腰とかにさせんだが？」

と俺は理由を言った。

勿論ふざけているわけじゃない。武器を携帯出来るという事は下に降りて武器を受け取つてる時にゾンビに喰われないとこう事だ。

「だからって何でアタシが、戦闘のプロの隆二にとか木刀を持たせて行かれせねば良いじゃない」

「戦闘のプロつて、俺は何時から戦闘員になつたんだ・・・（小声）

「

鈴木は自分一人で行く事に納得出来ないのか反論してくる。隆一が小声で何か呟いているが今はそれどころじゃない。

さてと . . . どうやって納得させるかな . . . 言葉だけじゃ納得しなだろうしなあ . . .

そうだ！色々な意味で危険かもしれないけどやるしかない！

「分かった、なら俺も一緒に行こう」

「「「「はあ！？（ええっ！？）」「」「

俺が言つた事に祐介、吉彦、綾香、と鈴木本人が驚いた。いつも鈴木と”夫婦”と言わるのが嫌いな俺が鈴木と一人で行動するなんて普通は思わないだろうな。俺だって正直嫌だけど、今は時間が限られているから我慢してやつた事だ。つか、吉彦の奴いつの間にか立ち直つてゐるし。

「な、な、何でアンタがアタシとい、一緒に . . . ？」

鈴木はやっぱり動転している。

まずいな、このままだと足手まといになっちまうな . . . 、やっぱり変な方向に進んでいくよなあ . . . 仕方ない！

俺は鈴木の目の前に来て彼女の肩に手を置いた

「なあ鈴木」

「は、はい！、な、何ですか！？」

俺が呼ぶと鈴木は返事をした。何故に敬語？

「いいか、俺は必ずお前をゾンビの餌にはさせない。俺がお前を守るから」

と俺は言った。

鈴木は顔を真っ赤にして下を向いた。
正直に言う、死にたい位恥ずかしい。穴があつたら入つて生き埋め
になりたい位恥ずかしい。

何で！？あんな格好付けた事を言つて恥ずかしいと思うのに決まつて
るだろ！！

鈴木はしばらく下を向いたままだつたけど、少しだけ顔を上げて上
目遣いながらも

「も、もしアタシが……噛まれたら……あ、アンタも一緒にみ、
道連れだからね……／＼」

「グバアッ！」「

と顔を赤らめながら言った。

そして、俺と祐介と吉彦は口から血を吐いて倒れた。すぐ近くでは
隆一が”面白そう”と言つてるような顔をしてた。

「ちょ、ちょっと大丈夫なの！？」

と鈴木が俺に駆け寄つて来て言った。

「あ、ああ大丈夫だ。
まあ、約束は守るさ」

「そ、そ…」

約束ちゅやんと守つてよね

俺は口の血を拭いながら答えると、鈴木はまた何時ものよひにシンシンじだした。

しかし、アイツにあんな秘密兵器を隠していたなんて・・・しかも自己紹介の時の綾香より強力だ・・・シンテレってのは時に恐ろしい程の破壊力があるのか・・・祐介と吉彦は綾香が診てるから大丈夫だな。

「じゃあ次は、武器をどうやって運び出すかだ。何か案がある奴は？」

俺は皆に聞いてみたけど誰も手を挙げない。
まあ、手が挙がらないのは普通だな。武器を運び出すかといふからにはスッてしまつと丸腰状態になつてしまつから、ちやんとした案を出すために考へてるんだろ？
しばらくすると

「一つだけ案がある」

「何だ？」

と隆一が手を挙げてやつて書いた。

「なに簡単な事だ。
誰かが武器を落として下の階にいる奴がソレをキャッチするんだ」

隆一は俺を見ながらやつて書いた。

「なるほど、じゃあ誰がソレをやるんだ？」

俺が聞くと、皆が一斉に此方を見た。

「…………お、俺ー!?」

「「当たり前だろ」「」

俺が驚くと吉彦と祐介がそう言つてきた。

恐らく、口では俺が何言つたって無駄なんだろうなあ・・・

「・・・・ハア、分かったよ。俺に拒否権は無いんだからやつてやる
よ」

俺は諦めてそつまつた。

「じゃあ、やつを始めるぞ。光治、やつをじつけ」

「ああ・・・つて、何で隆一が指揮つてるんだよ

「万が一の為だよ」

俺が聞くと、隆一が縁起が悪い事を言つてきやがった。

「つたぐ・・・まあ良いか、鈴木早く準備しろ」「光治、早くしなさいよ」「つて早ー！」

俺は鈴木に”早く準備しろ”と言おうとしたら、既に準備していく
逆に言われたから、俺もすぐに準備をした。

「じゃあ行くか

「そうね」

俺はギターを片手に鈴木と窓に向かつた。

カーテンを外そうとしたら、いつの間にか外されていた。

「あれ、誰がカーテンを外したんだ?」

「僕が外しちゃいました」

「おおそつか、ありがとな

どうやら、幸助が外したらしいから俺は礼を言つた。

「じゃあ、今度こそ行くか

「そうね、今度こそ

第4話 作戦会議！そして作戦決行！（後書き）

御意見、御感想等お待ちしています

キャラクター紹介（前書き）

2011.12.20

一部、追加、編集しました

キャラクター紹介

・片岡光治
(かたおかこうじ)

八王子高校3年B組

黒髪で若干目にかかる位でちょっとつり目で顔は中の上不幸体质で毒舌で主にツッコミ役

オカルト系大好きの祐介と綾香のせいで、授業の合間は新鮮な空気を吸うために廊下に出ている。

本人曰く、「祐介と綾香とはただのクサレ縁」。

李奈との夫婦疑惑(?)のせいで色々と悩んでいる為、李奈と二人の前では”夫婦”は禁句になっている(言われると顔面に渾身の右ストレートを放つ)

ゾンビが現れてからは成り行きで、いつの間にカリーダーになっている

ファーストキスの相手は生徒会長の楓とで、ゾンビ発生の前日には、いつの間にか婚姻届を出されていて、楓と夫婦になっている

貴、両親を交通事故で亡くしている

武器

椅子 ギター バット、警棒、銃(P2000)

・佐藤祐介

(さとうゆうすけ)

八王子高校3年B組

茶色がかつた短い黒髪をしていて顔は普通

一応ゾンビの囮役

オカルト系が大好きで綾香と共に光治を色々悩ませている

自前の双眼鏡でグランドにいる体操服姿の女子生徒を覗いていて、

教師達の悩みの種になっていた

何回か光治と李奈の前で”禁句”を言つてしまい、殴られた事がある

武器 無し 椅子 バット、ナイフ

・佐々木綾香

(ささきあやか)

八王子高校3年B組

黒のショートヘアで顔は上の中

若干天然

祐介と同じでオカルト系

が大好きで一人で光治を悩ませている
恥ずかしがりやで、人前で立つて発表したりするのが苦手でその時の姿が光治曰く「つい”カワイイ”と思つてしまつ」らしい

武器 無し 警棒

・鈴木李奈

(すずきりな)

八王子高校3年B組

黒髪のロングで顔は上の中

剣道部主将でツンデレ

隆一とは幼馴染み

光治との”夫婦疑惑”に悩ませられていて、禁句（ツンデレ、夫婦等）を言われると顔面を殴るか腹に蹴りをいれる

生徒会元副会長で楓とは知り合い

祖母と母親は昔最強のレディースだった

武器
木刀、刀

・坂本隆一

(さかもとりゅうじ)

八王子高校3年C組

金髪で顔は中の上で非常に目付きが悪い

不良

いつも授業をサボッて学校屋上で寝ているかタバコを吸っている
校外ではよく他校の不良に喧嘩を売られて、その度にボコボコにし
ている

此処等いつたいでは最凶の不良だが学校内では不祥事はあまり起こ
さない

最凶最悪のヤクザ軍団「坂本組」の組長の息子

武器
机ギター バット、ドス、警棒、銃マガロフ

・田中吉彦

(たなかよしひこ)

八王子高校3年C組

全てにおいて普通

レッリ大好きでベースのフレーに憧れている。

自己紹介では必ずレッリの事が出てきて、放つておくと2、3時

間は話続ける

何回か光治と李奈の前で”禁句”を言つてしまい、殴られた事がある

武器
ベース、ナイフ

ベース、ナイフ

・宮本幸助

(みやもとこうすけ)

八王子高校1年A組

黒髪のスポーツ刈りで顔は普通

弱気な性格で自己紹介の時などは光治と季奈を（特に光治の方）とても恐れていた

脱出直前でゾンビの餌食となり死亡

武器

無し 椅子 バット

・安岡光太

(やすおかこうた)

八王子高校2年A組

短い黒髪で顔は中の上

同学年の葵とは恋人関係にあって、葵の自己紹介の時は彼女に変わつて紹介をした

武器

無し 椅子 バット、ナイフ

・古林葵

(こばやしあおい)

八王子高校2年A組

黒髪のロングとショートの中間で顔は中の上

光太とは恋人関係にある

あまり他人とは話さない性格な為、彼に自分の紹介をしてもらつた楓と光治を羨ましがつていて（夫婦だから）

武器
無し ナイフ

・吉田楓「片岡楓」

(よしだかえで「かたおかえで」)

八王子高校の3年A組

黒髪のロングで学校一の美人

元生徒会長であり、学年首席の頭脳を持つていて、もつと上の高校からの推薦を受けていたが、光治と同じ学校に行きたいという理由で推薦を蹴つて彼と同じ高校の入試をうけた

中学2年の時に光治達がいる中学に転校してきて、其処で彼に一日惚れして皆の前でキスをして「結婚してくれ」と告白した

それ以来、修学旅行や光治の自宅で夜中に侵入して全裸で彼の布団に入り込んで朝まで寝てたりしている

ゾンビ発生の前日に勝手に光治の家の印鑑を盗んで、勝手に婚姻届を出して夫婦になつている為、実際には”吉田楓”ではなく”片岡楓”となる

武器

バット、警棒、銃(P2000)

・北斗麻樹奈

(ほくとまきな)

学校から出た光治達が偶然神社で出会った女性

大和撫子の様な人

神社は彼女の家で、道場もありかなり広い

普段は穏やかだが、怒らせると辺り一体に絶対零度の空気で包み込

み光治達一行を恐がらせる(隆一は除く)

「ついていきたくなつた」という理由で光治達と一緒に行動することになった

光治達と出会い今までゾンビの事は何も知らなかつた

武器

刀

・工藤俊明

(くわいとうじょうめい)

警察面

光治達がタイントと同族の奴に追われてた時に偶然助けた
その後、タイントと同族の奴が再び現れた時に成りゆきで光治達
と行動を共にする

武器

銃二丁（両方ともア2000）

第5話 夫婦になれるのは女性は16歳、男性は18歳になつてから（前書き）

先に言つておきますが、あともう一話までジンビは出ないと思ひます。

あと、PVが1000を越えてました。

こんなのも読んでくださいて、ありがとうございます。

第5話 夫婦になれるのは女性は16歳、男性は18歳になつてから

今俺は鈴木とコンピュータールーム（以下”CP室”）のベランダに降りて来た所だ。

「じゃあぶつ壊してくれよ」

「ええそつね、任せといて・・・って何で鍵がかかってるのが前提なのー？」

「おお、ノリツッコミか。鈴木も成長したんだな。

「冗談だよ。ちゃんと鍵がかかってるか調べるから」

俺はそう言つて窓に鍵がかかっているのか調べた。幸いにも鍵がかってないらしいから窓を開けた。

「よし、入るぞ」

「ええ」

そして俺と鈴木は中に入った。

「ハ、これは・・・」

「酷いわね・・・」

と俺と鈴木は口を押さえながら呟いた。

中にはゾンビは居なくて、あちらこちらに死体が転がつていってどれ

も頭を潰されていてグロテスクな光景が広がっていた。
恐らく、もう此処にはゾンビはないだろ？

「UJの光景を除けば大丈夫そうだな」

「ええ、じゃあ早く上の階を呼んできて」

「分かつたよ」

俺はグロい死体だけのCP室に鈴木一人を残して、ベランダに出た。
上から隆一が顔を出していたから俺はOKサインをだと隆一は頷いてから顔を引っ込んだ。

それからは、隆一以外がベランダからCP室に降りて来た後、俺は
隆一が落としてきた武器をなんとか全てキャッチした。
そして隆一が降りてきてから全員がCP室に居ることを確認してから、窓を閉めて鍵をかけた。

「しつかし、酷えなコレは・・・」

「まつたく、氣持ち悪すぜる・・・」

「吐き氣がするな・・・あつ、もうムリ・・・ガハハハハ」

隆一、祐介、吉彦の順に呟いて、そして最期に吉彦が吐いた・・・
つて、あのバカ！掃除するのに（死体や床に落ちている脳や肉片等
を部屋の隅に寄せるだけだが）何ヶを追加してるんだよ！

「とりあえず、死体とかを部屋の隅に動かすぞ。」

吉彦は自分のゲ もかたせよ

「あ、ああ・・・」

吉彦は蒼白い顔で答えた。

「じゃあ、女性陣はそこいら辺で休んでくれ

「うん、分かつた」

「そうね、さすがに疲れたわ。
じゃあ頼んだわよ」

「・・・・」「クツ」

綾香、鈴木、はそう言つて、2年の葵は領いて死体掃除の邪魔にならない所に移動した。

「よし、じゃあ始めるか幸助と光太はあまり無理するなよ

「「はい、でも、やれるだけやってみます（無理しない程度に頑張ります）から大丈夫です」「

お、なかなか良い返事だな。あの祐介と吉彦のバカコンビとは比べ物にならないな。

「そつか、じゃあ始めるかな。
祐介、吉彦、サボるなよ？」

「「何で俺だけ！？」

祐介と吉彦が驚いていたが、俺達は無視して死体掃除を始めた。

「さてと、先ずはアレからにするか

俺は一番近くにある壁に寄り掛かっている女性の死体に近付いた。
近くにはバットが転がっていた。

「おっ、バットか後でもうつておこうかな」

と小声で言い俺は死体を担いだ。すると

「スー・・・・スー・・・・」

と静かに寝息を立てていた。

「生き残ったのか・・・」

俺はそう呟いてからゆっくりと女性を床に降ろした。

「皆来てくれ、生き残りが居たぞ」

俺は皆を呼んだ。

すると皆が此方に來た。

「アンタ、まさか変な事してないでしょうね

鈴木がいきなり、とんでもない事を言つてきた。

「してねえよ！何で真つ先に変態に言つような事を言つんだお前は

と俺が呟つと

「誰が変態だ！」

祐介が反応した。

「お前は”変態”って言葉が出る度に出てくるなー。」

俺は祐介を黙らせた。

「その娘、噛まれてるかも知れないから、一応起こした方が良いと思つぞ」

「そうだな」

「隆一に言われた通りに俺は寝正在りの女性を起こすために揺すりながら

「お起きて、大丈夫か」

と呼び掛けると

「うう・・・・・うう・・・・・」

「ああ、起きたか。

どこの怪我はないよっておーー。」

起きたと思ったらいきなり女性はいきなり俺を掴んで引き寄せた。
今は誰も武器を持つていねい。

クソッ！ここまでか！

俺は噛まれる事を覚悟した。

・・・・？

何時まで経つても激痛がはしらない。

それどころか・・・何だ？この唇に伝わるこの感触は？

ゆっくりと目を開けると、そこには女性の顔が目の前にあった。

「…？」

俺は驚いて直ぐに女性から離れた。

周りには、いきなりの事で驚いている皆がいた。特に、鈴木と綾香は顔を真っ赤にしてた。

「な、何だ！？何があつたんだ！？」

俺は皆に聞く。

「な、何って、アンタ本当にわからないの？」

顔を真っ赤にした鈴木が逆に聞いてきた。

「あ、ああ」

「何だ？私達は夫婦だぞ。アレくらい普通だろ？」

俺が答えると女性の声がした。

その声の主は、さつきまで眠っていた女性だった。

「…か、楓（楓ちゃん）！？」

「会長！？」

俺と祐介と綾香と鈴木は驚いた。

あつ、そういうえば、鈴木は生徒会副会長だったな。

「久しぶりだな友人達、そして私の最愛の夫」

「おい、俺が何時お前と夫婦になつたんだ？」

「おい・ちょっとまって！」

吉彦が何か興奮しているようだ。

「どうした？」

「どうしただと…？何でお前が生徒会長とキスしてんだ！？」

俺が聞くと吉彦は若干キレイていた。

つて、さつきの感触はキスだったのか…？

「当たり前だろ？何故なら私と光治は夫婦なんだ。キス位は普通じやないなのかな？」

楓は俺の腕に抱きついて勝手に魅せつけている。
つか、胸が当たってるんですけど…

「ふ、夫婦だと…

光治テメエ！両手に女を羽生らかせやがって…！」

「俺は誰とも付き合ってねえよー。勝手な誤解すんじゃねえ」

俺はなんとか誤解を解こうと必死になつてゐる。

だが、その横で

「何を言つてるんだ光治は。

」の前の修学旅行で朝まであんな事をした間柄だろ?・

と楓がまた変な事を言つてきた。

「アレはお前が勝手に俺の布団に潜り込んでたんだろうがー・つか、あの時俺に何してたんだ!・?」

「自分でやつておきながら光治は何を言つてるんだ

おい、俺は何もしてねえぞ・・・

「へえ、やつぱりアンタつて変態だったのね

鈴木が微笑みながら（勿論曰は笑つていない）木刀を構えてきた。
クソッ！もう我慢の限界だ・・・

「楓ー！いい加減にしろー。」

「ひー。」

俺は我慢の限界にきて壁に叩き付けた。
楓は叩き付けられて顔をひきつらせた。

「わ、わりい楓、ついカツとなつて

俺は自分のしたことに気付いて、直ぐに謝った。

「いいんだ。夜まで待てなかつたんだろう？ 気にするな

良かった。気にしてないのか・・・って

「違えよ！ 何が「夜まで待てなかつたんだろう？」だよ！」

「なあ光治、詳しく述べてもらおうかな？」

「そうね、アタシも色々知りたいし」

吉彦と鈴木がそれぞれベースと木刀を構えながら歩み寄つて来た。

「分かつた、話すから武器を下ろせ…」

俺が全てを話す約束をすると、一人は武器を下ろした。
噛まれてもないのに頭を潰されるのは御免だからな。

「よし、じゃあ早く話せ」

「洗いざらりー、吐いてもらひわよ」

「ああ分かつたよ、あつ、その前に・・・楓、どこか噛まれてない
か？」

俺は過去を話す前に楓に噛まれてないか聞いた。

「ああ、今日も夢で光治に軽く首を噛ませたな

「夢の話じゃなくて現実だ！」

「何時もどんな夢を見てるんだコイツは。

「ああそっか・・・大丈夫だ誰にも噛まれていない」

楓は何故かちょっと残念そうに答えた。

「本当に噛まれてないな？」

一応俺はもう一度聞いてみた。

前に祐介に無理矢理見せられたゾンビ映画で噛まれないと嘘をついてた奴がいた事を思い出した。

「誰にも噛まれてないと言つただろ。お前は私を信用できないのか？」

「いや、念のためだ」

「もう戻ってよ」

俺は呆れながら答えた。

「わざと、じやあ話すかな。楓と出会ったのは、中2の時だ

俺は楓と初めて出会った時、つまり、全ての始まりの事を話した。

「吉田楓だ。

茨城から此処に転校してきた。よろしく」

と転校生が自己紹介をした。つか、さつきから此方の方ばかり見てるな・・・すると後ろに座っていた男、祐介が肩を叩いてきたから俺は振り向いた。

「なあ光治あの転校生、絶対俺の事見てるぞ」

いきなり何を言つてるんだコイツは・・・

「あつやつ、良かつたな」

俺はそう言って前を向いた。

確かにあの転校生は此方の方ばかり見てるけど、祐介はまず無いな。

「では吉田はあそこの空こてる席に座れ」

と担任が空いてる席を指しながら言つた。すると転校生はいきなり担任の手を遮つて

「いえ、良いです」

と言つて俺の隣に座つている女子生徒の前に立つた。

「すまないが、私にその席を譲つてほしい」

と頼んだ。

「イツ、何考えているんだ？」

「は、はい」

「やうか、ありがと」

女子生徒がはいと答えると転校生は一コロと微笑んで礼を言った。そして、女子生徒が空いてる席に移動すると転校生はバックを椅子に置いて今度は俺の前に来た。

「何だ？」

「お前、名前は？」

「片岡光治だ」

名前を聞いてきた為、とりあえず名乗ると転校生はいきなり両手で俺の顔を軽く掴んで一気に引き寄せてきた。

「うあつ！？」

いきなりの事で俺は何もできなかつた。

すると、唇と唇が重なつた様な感触がした。

1秒位でその感触は消えた。

「片岡光治、私はお前に一目惚れした。結婚してくれ

転校生は顔を赤くしながら、とんでもない事を言つてきた。
しばらぐすると

「 「 「 「 「ええ―――――.」 」 」

「 はあ！？」

とクラスの全員が驚いた

。勿論俺もだ。

おかしいだろ、恋愛つてのは普通はまず恋人からでそこから結婚に発展するか別れるかなのに、コイツは何だ？いきなりキスして結婚しろ？色々と省きすぎだろ。

この日、俺はファーストキスを訳も分からぬ状態で奪われて、殆んどの男子から非難の視線を浴びさせられて、色々と大変な毎日になつた。

（現在）

「あの日から俺は色々と大変なんだよ。
修学旅行で浴場で一人になつた時に何故か入つてるし、自宅で朝起きたら、何故か全裸の楓が隣で寝てた事もあつたし、まあコレはもうやつてないけどな」

「なるほどね、アンタも大変なのね。
ま、まさかファ、ファーストキスのあ、相手が、か、会長だつたなんてね」

俺が過去の事を話すと鈴木は何故か動搖していたが理由は聞かないでおこつ。

「実はな、一つだけすまないと思つてる事があるんだよ

「何なの？」

俺が一つだけすまないと思つてゐる事を話すと鈴木が聞いてきた。

「アイツ本当に此処より上の高校に推薦を受けてたんだけど、わざわざそれを蹴つて此処の学校に受けたんだ。それに対して俺はすまないと思つてるんだ」「確かに会長の学力ならもつと上の高校に行けたわね」

俺の言つた事に鈴木も同感のようだ。すると楓が鈴木の肩を叩いた。
「気にするな李奈、私はどんな高校でも光治さえいればそれで良いんだ」

何だらう、喜んで良いのか悪いのか分からねえや。

「そうだ光治、此処から脱出出来たらファーストキスをやり直しても良いぞ。アレは私も納得できていまからな。
それと、またあの時の様に一緒に寝てやっても良いぞ。勿論全裸でな」

れつきの話、全部聞こえてたのか・・・

「いや、アレはもういい。つか、何で俺が一緒に寝てくれと頼んでた様な言い方をするんだ！それに、さつきキスしたじゃねえか！なんでやり直す必要があるんだ！？」

「そんなの私の本能が勝手にそつさせてしまつたからに決まってるだろう。夫婦ならば両者が意識してやらないとな・・・ん？そ

うだ、今の思いで話で大事な事を思い出したぞ

話の途中で楓が何かを思い出したようだが、何か物凄く嫌な予感がする・・・

「な、何だ？」

俺はとりあえず聞いてみる。ああ、とても嫌な予感する。

「なあ光治、式は何時あげるんだ？」

「・・・・・はい？」

式をあげる？何の事だ？

「だから結婚式だ。何時私達は結婚するんだ？もう婚姻届は出したところに」

結婚式？婚姻届？何の事だ？とりあえず聞いてみよう

「なあ楓、俺はお前と結婚する約束した覚えがないんだが・・・それに、勝手に俺とお前の婚姻届を出したのか？」

俺は一応聞いてみた。

「何だ忘れたのか？まったく、光治は忘れやすい性格なのか？まあそれよりも婚姻届の事だが、正直お前に内緒で出したのは、すまないと思ってる。だが、お前に見つかると処分されるから、仕方なくお前の家の印鑑を盗つてしまつたんだ。許してくれ」

「ああなるほどね、じゃあ仕方ない・・・訳ねえだろ！何勝手に俺達を本当に夫婦にしてんだよ！それに勝手に人の家の印鑑盗んでじゃねえ！」

「まつたく、ゾンビが現れなかつたら、今頃私達は結婚式の予定を話しあっていたというのに、光治も辛いのか」

黙りだ、まつたく俺の話を聞いてない様だからからこれ以上何か言うのは止めよう。それよりも・・・

「もういいから、女性陣はとりあえず掃除の邪魔にならない所に移動してくれ」

「光治は素直じゃないな。私と結婚したいならそう言えば良いのに

「早く行け！！」

俺が怒鳴ると楓は黙りこんだ。

あっ！ヤベエ、またついカツとなつちつた。

「わ、わりい楓、ついカツとなつて」

「いや、さすがに今回は私が悪かった」

・
今回はつて、その何時もは悪くないみたいな言い方なんなんだ・・・

「分かつた。じゃあ掃除の邪魔にならない所で休んでくれ」

わつきはキツい口調で言つたから、今度は優しい口調で言つた。

「すまないな」

楓は二「ひとつ微笑んでから鈴木達と死体が無い所へ移動した。

「どうりでモテる訳だ」

「隆一、どうゆう事だ？」

隆一の言つた事が分からぬから聞いてみると、「何でもねえよ」と言つて近くにあつた死体の所に向かつた。

気になるが今は死体を片付けるのが先だな。

俺はとりあえず一番近くにあつた死体の所に向かつた。

そして死体等を隅に片付けた後、皆に楓の自己紹介をする事にした。

「吉田楓だ。

クラスは3年A組で元生徒会長だ。ちなみにファーストキスの相手は其処にいる光治とで、昨日に婚姻届を出して今は夫婦だ。よろしく

楓は皆に自己紹介をして二「コトとした。

笑うと可愛いんだけどなあ・・・でも、アレのせいで色々と大変なんだよなあ・・・

「・・・楓先輩、羨ましいです」

と今まで黙っていた葵がやつと喋つた。

羨ましいって、こちからすれば物凄い迷惑なんだけどな・・・

「じゃあ楓の紹介が終わったから情報を集めるか

俺は呟きながら呼びかけた。

第5話 夫婦になれるのは女性は16歳、男性は18歳になつてから（後書き）

御意見、御感想等お待ちしております。

あと、キャラクター紹介に新キャラを追加しました。

第6話 一休俺達、Iの先駆になれるか? (前書き)

本当にゾンビは出れなかったのですが、どうやら出しきつてしまふました。

第6話 一休俺達、何の先づくなるの？

「じゃあ、とりあえず情報収集でもするか」と俺は皆に聞こえたる様に言った。

「そうね」と俺は皆に聞こえたる様に言った。

「何で、ゾンビが現れたのか知りたいしね」

「どうやら鈴木は賛成のようだ。

「どのくらい被害を受けてるかも知りたいな」

隆二も賛成か・・・まあ、皆も同じ事を考えてるだろうから、良いかな。

「じゃあ早速、情報を集めるか」

俺はそう言つて近くのパソコンの所へ行つて電源を入れた。
そして、Y a o o - P n を開いた。

「おお、凄いな。
皆見てみろよ」

俺がそつと皆がY a o o のニュース記事に釘付けになつた。

「す、凄いな・・・」

祐介は思わず息を飲む。

「これは・・・こんな事が有り得るのか?」

楓はどうやら信じられない様だ。

まあ無理もないな。何せ記事の内容は

「2012・12/10・09:25

ヨーロッパ州、アメリカで人が突如凶暴化!政府は軍による事態の鎮圧を発令するが、未だに原因は不明】

「2012・12/15・12:02

アメリカ、イギリスのCDCから、あるウイルスが何者かによって盗まれた事が発覚!英、米政府は「バイオテロの可能性がある」と発表】

「2012・12/19・15:27

国立感染症研究所から”レベル4の中で最も危険なウイルス”が盗まれた事が発覚!警察はバイオテロの可能性もあるとして犯人を捜索中】

「2012・12/22・08:01

関東地方でも人が凶暴化!政府は警察による事態の鎮圧を発令】

といった、要するにゾンビ関連の記事ばかりで、十日位前にイギリスとアメリカで今と同じ事が起こり始めた様だ。

「これは、近いうちに世界中で起こるかもしれないな・・・」

「同感だ」

俺の思つてた」とを隆一も思つてたらしい。

「な、なあ、俺達この先どうなるんだ？」

吉彦がかなり動搖した様子で聞いてきた。

「吉彦、はつきり言つておくが……このままだと人類は皆ゾンビになるだろうな」

俺は自分が思つていた事をそのまま答えた。

「や、そつか……」

まづいな・・・吉彦の奴、物凄く動搖してやがるなどうするかなあ・・・・・そうだ！」

「吉彦、とりあえずレッ リ聞いて落ち着け」

俺は吉彦を落ち着かせる為にレッ リを聞く事を薦めた。すると吉彦は

「ああ・・・」

とだけ言つて、制服からイヤホン付きのipodを取り出してイヤホンを耳にかけた。

「吉彦君、物凄く動搖してるけど大丈夫かなあ

綾香が吉彦を心配そうに見ている。

「ああ、確かに」

俺も同感だ。

吉彦には何時もの様に戻つてもらわないと、俺達が全滅する可能性があるし、正直アイツも死んでほしくはない。

「先輩・・・僕達どうなるんでしょうか・・・」

幸助が酷く落ち込んだ様子で聞いてきた。

「大丈夫だ。

俺が誰も死なせはしないからな」

「そうですか。

じゃあ先輩、もし僕がゾンビになつたら「この嘘つきめえええええ！」と叫びながら走つて追いかけますから

幸助は俺が言つた事に安心したのか、『冗談を言つてきた。

「なら、死なせない様に頑張らないといけないな

俺は幸助の『冗談にわざとのつた。

すると、今度は綾香が来た。アイツも動搖してたのか。

「ねえ、光治君」

「なんだ？」

「CDCとか、国立感染症研究所とかって何？」

・・・あれ？全然動搖していないんだけど・・・何？この騙された感は・・・まあ、とりあえず教えとくか。

「CDCじつてのは、アメリカとかにある疾病管理予防センターの事で、そこに危険な細菌やウイルスを厳重に保管、そして研究しているんだ。

国立感染症研究所は、その日本バージョンって訳だ。分かったか？」

俺は綾香にCDCじと国立感染症研究所の事を簡単に説明した。

「へえ～、光治君は詳しいんだね」

「いや、実際には祐介に『未知のウイルスによる感染』を扱った映画とかで出るから覚えとけ」と言われて無理矢理覚えさせられた事だからな

綾香に褒められたけど、俺は知ってる理由を話した。

「あ、そうだよ思い出したよ。

CDCじつて言葉がR Cノク ラン インで出てきたんだよ

・・・・はい？

綾香が何か思い出した様だけど、俺にはサッパリです。
何か祐介がいきなり肩に手を置いてきた。

「な、覚えてて正解だったわ」

やかましいわバカ！

なんなんだその？は！？すげえムカツクんだけど！

「ねえ、これからどうすんの？」

「このやり取りに呆れたのか鈴木がこの先どうするか聞いてきた。

「とりあえず、此処に居ても直ぐに死ぬから学校から出る」

「それから？」

「それから・・・・・ええっと・・・・・分からねえ・・・」

「はあ！？アンタ、それ本気で言つてる訳！？」

鈴木に怒られてしましました・・・・

「ま、まあ、とりあえず食料を確保しながら安全な場所を探すから大丈夫だ」

「本当に大丈夫なの？」

「頼む！これ以上ダメ出ししないでくれ！」

俺の精神がボロ炭の様に崩れ落ちてしまう…

「まあ李奈、そのくらいにしといてやれ

丁度良いタイミングで楓が来てくれた。

ナイス楓！と俺は心の中で叫んだ。

「でも会長、コイツ後の事を何も考えてないんですよー。」

すると鈴木が楓に意見してきた。

「成る程、だけど李奈、こいつは後の事よりも今、どうやって脱出するかの方が最優先じゃないのか？」

「確かにそうですけど……」

さすがは元会長だ。

あんな短い言葉で鈴木を納得させてるぞ。

「まつたく、お前は何時も先の事ばかり気にしそぎで、今どうするかとなると全然駄目だからな。

だから何時まで経ってもお前が好き！」

「分かりました！ 分かりましたから、それ以上先は言わないでください……」

楓が何かを言いかけた途端、鈴木は顔を真っ赤にして叫んだ。
何か知られたくない事があるんだろうな。
そんな事よりも……

「なあ楓、なんで鈴木はお前に敬語を使ってるんだ？」

俺は鈴木と楓の会話で気になつた事を聞いた。

「なんだ光治、まさか浮氣か？」

「違えよーてゆうか、何で俺達が夫婦になつてんだよーー！」

「さつき話したじやないか。「昨日婚姻届を出した」って、まつた

く光治は物忘れが激しいな

そうだった。

楓に勝手に婚姻届を出されて夫婦になつていていたんだ……
とりあえず……話を戻そ。

「浮氣じやねえよ。

ただ、同じ年なのに何で敬語を使つてるか気になつただけだよ

「実のところ、私にも分からんんだ」

アレ？ 楓自身も分からぬのか？
じゃあ仕方ないな。

「それよりダーリン、これからどうするんだ」

楓がこの先どうするか聞いてきた。

「そうだな、とりあえず野球部の部室に行つてバットを手に入れて
から、なるべく無駄な戦闘を避けながら脱出するつもりだ」

「無駄な戦闘を避けるか……確かに、死亡する確率が下がるか
ら良い案だな」

おっ、ちょっとした案なのに結構評価が高いな。

そうだ、一言言つておかないと

「そうだ楓、その”ダーリン”だけは止めてくれ。吐き気がするか

「そりゃ、それはすまなかつた。もう言わないよ

実際吐き気はしないけど、凄く嫌な気分になるからな。
楓の性格上、もう一度と言わないだろ？。

「あつ、そういうば光治」

「何だ？」

楓が何かを思い出したらしく俺を呼んだ。

「私が持つていたバットを知らないか？そりゃ起きてからずっと見
当たらないんだが・・・」

バット？・・・ああ、俺がさつき見つけたアレか

「それなら、お前が眠つてた所辺りにあつたぞ」

「そりゃ、すまないな」

俺が教えると楓は礼を言つてから自分がさつきまで眠つていた所に
向かつた。そして、楓と入れ代わる様にして光太と葵が来た。

「・・・楓先輩と仲が良いんですね」

「ああ、まあな」

「・・・夫婦ですか、羨ましいです」

うへん、「コレって喜んで良いのか？悪いのか？・・・って、あれ？」

「なあ、まさかそれを言つ為だけに一人で来たわけじゃないよな？」

俺は気になつた事を聞いてみた。

今”はい”と答えたなら多分ぶちギレるな俺。

「違いますよ。

ただ、扉か窓のどちらから出るのか聞きたくだけですよ」

ああ、その事か。

「それは、皆を集めてから話すよ」

俺がそう言つと一人は

「そうですか」

「・・・夫婦なんて羨ましいです」

と言つて戻つていった。つか葵、どんだけ羨ましがってるんだよ・・・

そりこえば、隆一はさつきから座禅組んで何してるんだ?

「待たせたな、私と離れて寂しかったか?」

俺が気になつて調べに行こうとした瞬間、バットを持った楓が戻つて來た。

「別に寂しくはないけど、何で俺がお前に『レデレみたいな言い方をするんだ?』

「何だ？違うのか？」

「違うわー！俺が何時お前がそう思つ様な言い方したんだー！？」

「おかしいな・・・アレは夢だったのか・・・」

「ああ、夢の話か・・・なら、あんな事を言つたのが納得できる気がする。」

「ちひい、それよりそろそろ行くか」

「ちひだな

「皆一そろそろ学校からおひがみますわ」

俺は皆に聞こえる様に言った。すると一部の女子と隆一を除いた5人が自分の武器を持つて

「「「待ってたぜ（待ってたわよバカ！）（待つてましたよ）」」

と同時に言った。

あれ？何でこんなにヤル気満々なんだ？
吉彦がいつの間にか復活してるし。

「うう・・・」

「お、隆一が起きたようだな。

「 もう行くのか？」

と隆一が俺に聞いてきた。

「ああ。

そういえば、お前だけに静かだったけど、座禅組んで向してたんだ
？」

俺は答えてから気になつた事を聞いた。

「ああ、寝てた」

寝てた？ああ、そうですか・・・

「で、何処から出るんだ？窓か？扉からか？」

「そうだな・・・とりあえず前は危ないから窓からでるや

バンバンバン！

窓が叩かれる音がした。ゾンビが来たんだろう。

「と思つたけど、窓の方にゾンビが来たから扉から

バンバンバン！

どうやら、ゾンビがやつて來た様だ。

「 も出れないな

隆一が続きを言つてくれた。

ぶちギして良いですか？

「ねえ光治、どうするのよ」

鈴木が聞いてきた。

勿論答えは一つに決まってる。

「あ・・・・・どうなるんだろうな俺達」

第6話 一休俺達、いの先どひなゐの? (後書き)

御意見、御感想等お待ちしております。

第7話 マジで不満あるんだけど・・・(前書き)

今回はこつもよつ若干短いです。

第7話 マジで不幸あるんだが…

「俺達、一体どうなるんだが…？」

俺は皆にとりあえず聞いてみた。

何故って？そりゃ、窓と扉と言つてしかない出入口をゾンビ塞がれただぞ！こんな事、普通に言いたくなるわ！」

「知らないわよ。

むしろ、アタシが知りたいわよ」

唯一鈴木だけが答えてくれたけど、俺と同じ事を考えていた様だ。そして皆は黙りこんで、聞こえるのはゾンビが窓と扉を叩く音だけになつた。

「やるしかないな

隆一が口を開いた。

「やるって、何をやるんだ？」

俺はとりあえず聞いてみた。

「窓と扉が破られるまでは時間があるから、どっちか片方を開けて中にゾンビ達を入れて、ソイシラをぶつ瀆せばいいんだ

「かなり危険だけど、この際仕方ないか。
で、誰が開けるんだ？」

「お前らは田で俺に『やつやどジンビに喰われて死んじまえ！』って言つてたんだから、いつか見てきた……って俺！？」

「お前らは田で俺に『やつやどジンビに喰われて死んじまえ！』って言つてたんだから、いつか見てきた……って俺！？」

「わがまま言つてる場合じゃないだろ。早くどつちか開ける！」

隆一が殺氣を込めながら言つ。

隆一・・・そんなの無茶苦茶理不尽だろ・・・

俺に拒否する権利は無いのかよ・・・

「わかったよ・・・」

俺は諦めて窓に向かい、そして窓に手をかけた。何で窓にしたかつて？なんとなくだよ。

「よし開けるぞ、期を引き締めろよ」

俺が皆に言つと、皆は自分の持つてこる武器を構えながら頷いた。

ちなみに皆の（俺自身も含めた）武器は

椅子：幸助、光太、祐介

ギター：隆一、俺

ベース：吉彦

木刀：鈴木

バット：楓

武器なし：綾香、葵

となつている。

そして俺は拳一個分位の隙間を開けた。

「つねー！」

俺は開けた隙間から無数のゾンビの手が出てきたから直ぐに下がって、自分の武器であるギターを持つて構えた。

窓の隙間が広くなつていき、徐々にゾンビのグロテスクな顔が見えてきている。

生前に眼球を喰われたらしいゾンビや顔の骨が露出してる奴もいるし、唇が無くなつていて歯が見えてる奴もいた。

そして、その内の一體が窓から入つて来た。それを拍子に次々と他の奴らも入つて来て、こっちは向かつて歩いてきている。

「よし、行くぞー！」

俺がそう言つて駆け出したと同時に隆一、鈴木、楓、吉彦が駆け出す。

俺は一番近くに居るゾンビの頭を狙つて、ギターを横に振つた。ゾンビは少し吹つ飛んで倒れたが、まだ動いているが、そこに椅子を持った祐介が来て倒れているゾンビの頭に椅子の足の部分を降り下ろした。

グシャツ！

と音がして、ゾンビは動かなくなつた。ゾンビの頭からはグシャグシャになつた脳が流れ出でていた。

隆一達は次々とゾンビの頭を潰していく。

あれ？ 隆一は俺と同じギターなのに何で一撃で倒してるんだ？ つて、そんな事考へてる場合じゃないか。

俺はまた近くに居るゾンビにギターのフルスイングをお見舞いした。

グシャツ！

と頭が潰れる音がしてゾンビは倒れた。

一発で倒せると何か気持ち良いな。

三体目のゾンビを倒そうとしたが、もう既に”窓から来た組”は全滅していた。

俺が倒したのを含めた10体のゾンビの死体（既に一回死んでるけど）がそこいらに転がっていた。

「よし、じゃあ早く此処からおひらばにするか

俺達は窓からベランダに出た。

そして今はベランダを歩いていて、その後何も起こらずじどうかの教室に入った。

え？ 何か起こってほしかった？ …… フザケンナー！ つまり生と死の狭間を歩いている様なもんなんだぞ！

そして、教室の扉を開けて廊下を走って、階段をかけ降りて、またかけ降りてつてようやく一階についた。

「あれ？ そりいえば、さつきからゾンビ達が見えない様な

俺は、ふと気になつた事を言つた。

「ゾンビが居ないなら、それはそれで良いじゃない」

「あのなあ鈴木、確かにゾンビが居ない事は良いことだけど、逆に何か気になるだろ」

「確かにちょっと気になるけど・・・」

「何してるんだ、早く来いよ」

隆一が俺達を呼んでいるな・・・って、あれ?俺達止まつてたの?

「お、おい早く行くぞ」

「えー?あ、うん

何か鈴木の返事が曖昧だったが、そんなのは一々気にしてられない。そして俺達は昇降口で靴を履き替えて外に出た。あとは、部室に行ってバットを手に入れて校庭を突っ切つて行くだけだ。

「よし、早く部室に行こう

俺達は部室に向かつて行った。

そして、その途中でゾンビが三体位出てきたからとりあえずSAT UGAIして野球部の部室前にやつてきました。

「鍵は・・・ラッキー何故か掛かつてないぜ

「この学校つて、大丈夫なのか?」

祐介は鍵が掛かっていない事に大して呆れている。

「とりあえず中に入るかな。そうだ楓、ちょっとバット貸してくれないか?」

「別に構わないが

「そうか、サンキュー」

俺は楓が使用していたバットを借りて中に入つて、偶然中で食事中だつたゾンビの頭を潰して、ついでに、喰われた奴（もう死体だが）の頭も潰しておいて部室内にあつた全てのバットと何か使えそうなエナメルバック2つを取つて部室から出た。

「じゃあ皆で分けるか

俺はそう言つて吉彦、鈴木、綾香、葵を除いた6人（自分を含めた）で分けた。

それでも数本残つたから

バックに入れて綾香と葵に持たせた。

「後は、校庭を突つ切るだけだな」

俺達は校庭に向かった。

あとは突つ切るだけだと思っていたが、校庭を見た俺は思わず

「は？ 何これ？」

と言つてしまつた。

何故なら、校庭にはおびただしい程のゾンビの大群が居たからだ。

何？俺達にゾンビ無双でもじろと呟つてるとんですか？

「どうするんですか先輩」

幸助が聞いてきた。

「とりあえず、突っ切るのはやめて廻つて行こう」

「確かにそれが安全、いや、それしかないか」

「そうだ吉彦、それしかないんだよ。

「じゃあ早く行きましょ！」

光太がそう言った。

「いいか、ゆっくりと音を立てずに行くな」

俺はゾンビに聞こえない位の声で囁いて、全員が頷いた。
そして俺達はゆっくりと歩き出した。

ゆっくりとゆっくりと・・・・・あ、ゾンビをすかれた・・・つて、
視力がある足番ゾンビかよー
よし、こいつなつたら

「全員走れえええええ！」

俺は大声で叫んで、思いきりダッシュした。
他の皆も少し遅れてからダッシュした。

「光治テメエ！何が『ゆっくり行くぞ』だ、いきなり大声上げて思
いきりダッショウしやがつて！」

祐介が怒鳴ってきた。

「仕方ねえだろ！アイツ等目が見える奴だつたんだから！」

俺は大声を上げて思いきりダッショウした理由を言つた。

「ゾンビが目が見えるのは当たり前だらうが！」

祐介に反論された。

だつて、ス デットだとアイツ等目が見えないんだぞ！
目の前にゾンビが居たが

俺は

「邪魔だあああ！」

と叫んでゾンビをぶつ潰してまたダッショウした。

「もうすぐ校門だぞ！頑張れ！」

俺は皆に向かつて大声で言つた。

まあ、猛ダッショウしてればあつという間につくよな。

そして待たしてもゾンビが立ちはだかったから、真っ先にバットで
薙払つた。

校門の目の前に来た瞬間

「ギャアアアアアアー！！」

と誰かの悲鳴がしたから振り向くと、ゾンビが何かに群がっていた。
今居るのは、祐介、綾香、隆一、鈴木、吉彦、楓、光太、葵・・・
居ない、幸助が居ない。

ゾンビが群がっている所は、俺がゾンビを薙払つた所だ。

「クソツッ！」

俺は自分の過ちに苛立ちを感じて悪態を吐いた。
あの時、ゾンビはまだ殺られてなくて、ソレが幸助の足を掴んだのだ。

「おい光治早く行くぞ！幸助はもう助からない」

隆一の言いつとおりだ。

幸助はもう助からない、死んだんだ。

「幸助、ゴメン！？」

俺は幸助に謝つてから、皆と共に学校から出た。

第7話 マジで不幸があるんだけど・・・（後書き）

御意見、御感想等お待ちしています。

第8話 やはり魔法少女の魔女はつまこちゃん（前編）

新キャラがちよいじだけ出してもか。

第8話 やっぱり炎の空気はつまこせ

何とか学校から出た俺達は、とりあえず近くのコンビニに向かって
いる訳だが・・・

街は学校より酷い事になつてているんだよなコレが。あちこちで車が
炎上してるし道路とかには血や骨や内臓とかが散乱していて臭いの
なんので、それに

ドガアアアアアン！――！

わざわざから今みたいな爆発があちこちで起つてるし

パーン！パーン！パーン！

と銃声が聞こえるし、恐らく警察がゾンビに向かつて発砲してると
だろうけどね。

そんなこんなでしばらく歩いてるとコンビニに着いた。

「これは・・・酷い有り様だな」

まあ楓がそう言つのも無理はない。

コンビニのガラスは割れててさらに血が付いてるし、外から見ても
分かる位に中は色々と凄い事になつてているからな。

「じゃあちょっと調べてくれるか

俺はバット片手にそつまつてコンビニの出入口（自動ドア）に向か
つた。

すると、後ろから祐介と楓が来た。

「一人じゃ危険だろ」

「私は妻としてお前と行動を共にするからな」

「わかつたよ。

じゃあ、入るぞ」

俺と祐介と楓の三人でコンビニに入った。
コンビニ内も壁や床に血が飛び散っていた。

「とりあえずゾンビがいるかもしねないから、手分けして調べるか」

俺が一人に言つと、楓が真っ先に俺のバットを持つてない方の腕に抱きついた。

「じゃあ私は光治と行動を共にしよう。何せ私達は夫婦だからな」「あのなあ、それは」「オッケー、じゃあ俺は事務室の方を調べて来るよ」って、オイ

俺が夫婦は関係無いと言おうとしたら祐介は勝手に事務室の方へ行つてしまつた。

一応リーダーは俺だぞ・・・・

「しううがねえな。

じゃあ俺達は店内を調べるか

「そうだな」

「ああそうだ。俺の腕に抱きつくな歩きづらこ

「別に良いだろ？ 何を恥ずかしがっているんだ？」

「もういい、好きにしや」

俺は今の楓に何を言つても無駄だとわかつたから、仕方なく諦めた。

「とりあえず便所だけ調べるか」

「何故トイレだけを調べるんだ？」

「居そうな感じがするからだよ」

俺は楓の質問に答えてから便所の前まで行き、とりあえずノックしてみたが、反応は無い。

「よし開けるぞ」

俺は取っ手に手をかけてゆっくりと扉を開けた。中には・・・誰も居なかつた。

「誰も居ないか」

「光治、下を見てみる」

楓が何か気付いたらしく便所の床を指した。
そこには

「血？」

そう、床に血が付いていた。え？驚く事じゃない？いやいや、血といつても色々な所に飛び散ってるわけではなくて、引きずられた様な血の跡があつた。

「これは・・・用心した方が良いな

「確かにそうだな」

さつきから俺の腕に抱きついていた楓は腕から離れた。
足音を立てずにゆっくりと血の跡を辿つて行くと、個室トイレに繋がっていた。

「よし開けるぞ」

俺が楓に言つと、楓はバットを構えて頷いた。
そして、ゆっくりと個室トイレの扉を開けた。
中には・・・頭がグシャグシャになつて顔がわからない様な人が便座に座つていた。
あまりにグロ過ぎたから急いで扉を閉めた。

「よし、大丈夫だな。とりあえず戻るか

「そ、そうだな」

さすがに刺激が強すぎたらしく楓は少し動搖していた。
楓を連れて店内に戻ると丁度祐介も戻ってきた。

「そつちはどうだった？」

俺はゾンビだとが居ないか聞いてみた。

「誰も居なかつたぞ。

そつちはどうだつたんだ?」

祐介は答えて、俺に同じ様な事を聞いてきた。

「トイレにグロい死体が一体あつたが、ゾンビは居なかつた」

「わうか

「じゃあ、食料と水を探すか」

店内が安全だとわかつたから俺達は食料と水を探すことにした。
そして収穫は、カローメート数個、ポテトチップス数袋、おにぎり数個、etc

まずはまずの収穫を得て、俺達はゾンビーから出た。

「やつぱまつまつぜ」

「お前は犯罪者か? それとも長期入院でもしてたのか?」

祐介の言つたことに俺は突つ込んだ。

「収穫は?」

吉彦が真つ先に聞いてきた。

「まあまあだな。

あと、吉彦の分は無いからな

「えー・マジでー?」

「冗談だ」

俺はちよつと吉彦をからかつた。
なんだろな、こいつからかつて困つてる奴の顔を見ると心の何処かに
快樂が生まれてくるんだよな。

「アンタって、どうしかこといつとひよね

鈴木が開口一番にこいつ言った。

「酷いなまつたく、俺はうじじゃねえぞ。
ちよつと相手を困らせて快樂を得てるだけだぞ」

「せうゆう人をうつて言ひのよ」

反論したら鈴木に論破されました。やっぱり元副会長には敵わない
よまったく。

「せういえば先輩方、親に連絡したんですか?」

光太がいきなり俺達に聞いてきた。
親ねえ・・・・・

「してないぞ」

「ううん、しないよ

「しないわ

「してないな

「やういえば、していない」

「いや、していないが

祐介、綾香、鈴木、隆一、吉彦、楓の順に答えた。俺は答えなかつた。

「お前等は電話したのか？」

俺は光太と葵に同じ様な事を聞いた。

「はい、だけど親は出てきませんでした

「・・・私も同じです」

なるほど、電話はしたけど出でないのか。

「じゃあ俺達も電話するか」

祐介がそう言ってケー・タイを出して電話をかけた。その後に続く様にして綾香、鈴木、吉彦、楓もケー・タイを出して電話をかけた。

しばらくすると、ケー・タイを出してた五人はケー・タイをしまって首を横に振った。

どうやら出なかつたらしい。

「あれ？坂本先輩と片岡先輩は親に電話しないんですか？」

光太が電話をしなかつた俺と隆一に聞いてきた。

「ああ、アイツなら大丈夫だろ？」

大丈夫って、隆一の親は海外にいるのか？

「片岡先輩は？」

「親はないよ。昔、交通事故で両親共々死んだんだ」

俺の言葉に皆は絶句した。やつぱりな、いつなると想像ついたよ。

「す、すいません」

「気にするな。俺だってガキじゃないからな」

光太が謝ってきたから俺は、気にしてないと答えた。
それに対しても・・・空気が重すぎる。

「それよりも、この後の事を考えようぜ」

俺は重すぎる空気を払う為に話題を変えた。
すると、皆がいきなり武器を構えた。
ヤベー、とりあえずまずは落ち着かせないと…

「まてまてー何か知らないが俺が悪かったから武器を下ろしてくれ
！」

「そりゃないわよバカ、後ろを見なさい」

俺は鈴木に言われた通りに後ろを向くと、ゾンビの大群が迫って来ていた。

「どうするんだ光治！」

吉彦が聞いてきた。

答えは一つだけに決まってるだろ。

「とりあえず・・・逃げるぞー走れー！」

俺はそう答え、買い物籠の中にある食料と水が落ちない位のスピードで走った。他の奴も俺と一緒に走った。
何かあのゾンビ達ちょっと速いんだけど、祐介に見せられたウーキングッドのと同じ位の速さなんだけど。

そして、しばらく走つてたら囮まってしまいました。なんでだよ！
学校からコンビニ行くまではゾンビなんて出てこなかつたのに、何で今になつてゾンビの大群が出てきて囮まれるんだよ！

「おー、どうするんだ！？」

祐介が慌てた様子で聞いてきた。

ええっと、どうする？ 何処かに道は無いのか！？
辺りを見回すと、一つだけ道を見つけた。

「あそこに行くぞー！」

俺はさつき見つけた一つだけの道の方向を指した。道といつても鳥居があつてその後ろには階段が続いているだけだけど、今は道はそこしか無いので俺達は唯一残された道へと向かつた。

ゾンビと戦えば？俺達にそんな事は出来ないぞ。全員がアスミたいに超人じゃないからな。

「本当に此方で大丈夫なの！？」

必死に階段をかけ上がつてると鈴木が心配になつたのか聞いてきた。

「しようがねえだろ！此方に行かなかつたら、俺達死んでたんだぞ！」

俺はそう答え、振り向かずに階段をかけ上がつていった。

しばらくすると、階段地獄が終わつてそこには神社が見えた。下を見るとゾンビは見当たらぬ、きっと俺達を見失つたんだろう。

「中々良いところね

どいつやら鈴木はこの神社を気に入つたらしい・・・ん？あれは

「人？」

と俺が言つと皆が反応した。

「何処に居るんだ？」

隆一が聞いてきたから俺は無言で人が居る方向を指した。

「もしかするとゾンビかもしれないな」

確かに、楓の言うとおりだ。人だからといって生きてるかはまだわからない。

「幸い一体しかいないなけど、皆氣を付けろよ。綾香はコレを持つててくれ」

俺はそう言つと皆が頷いたから、俺は綾香に食料と水が入った籠を綾香に渡してからゆづくつと歩き出した。
俺の後を皆がつけている。

そこには、巫女装束を着ている女性が簫を持って地面を掃いていた。巫女さんは俺達に気付いたのか此方を向いた。どうやらゾンビじゃない様だ。それにしても綺麗な人だなあ、大和撫子だよアレ、思わず見とれてしまったよ。

「あら? こんな所にお客なんて珍しいわね」

巫女さんは優しい口調でそう言つて微笑んだ。

第8話 やっぱり恋愛の空気はつまこせ（後編）

キャラクター紹介に新キャラを追加しました。

第9話 俺の周りは危険がいっぱい=俺は不幸の塊（前書き）

過去最高の長さです。文字数が万単位に達しました。
あと、アクセス数が2000を突破してもうすぐで3000になります。

こんなのも読んでくださいてありがとうございます。

第9話 僕の周りは危険がいっぱい=僕は不幸の塊

「あら? こんな所にお客なんて珍しいわね」

巫女はそう言って二コリと微笑んだ。

そうだ、皆疲れてるだろ? だから一晩だけ此処に泊まらせてくれるように頼む為にこの神社の持ち主に会わせてもらおう。

「こんちは、僕は片岡光治と言います。

いきなりですが、この神社にお住まいの方に会わせて頂けませんか?」

俺はまず自己紹介してから神社に住んでる人に会えないか聞いてみた。

「片岡光治君ねよろしくね。それで私の家に何か御用かしら?」

「…え? 「私の家」?まさか…

「もしかして、貴女がこの神社にお住まいの方ですか?」

俺は念のために聞いてみた。もし聞き間違いじゃないとしたら、この人は凄いぞ。

「ええ、 そうよ。

この神社に住んでる北斗麻樹奈です。マキナって呼んでください」

巫女さん 北斗麻樹奈さん(以下マキナさん)は質問に答えてから自己紹介をした。

「ではマキナさん。

いきなりですが、一晩だけ此処に泊めさせてくれませんか？」

俺は早速この神社の持ち主であるマキナさんとの交渉を開始した。何か結末が大体予想つくような・・・

「う～ん・・・・いいわよ」

マキナさんは、ちょっと悩んでからOKしてくれた。

「本当にですか！ありがとうござい」とでも、一つだけ聞きたい事があるの？」え？」

「聞きたい事？泊めてもらえるなら別に良いかな。

「いいですけど」

「貴方達が持つてる血の付いたバットの事なんだけど・・・誰かを殺したの？」

「確かに殺しましたが、一度は死んだ人達しか殺してません」

俺はマキナさんに聞かれた事に対して、正直に答えた。

「一度は死んだ人達？」

マキナさんは首をかしげた。

あれ？この人ゾンビを知らないのか？いやいや、そんな筈がない。

今関東はゾンビに埋めつくされてるんだぞ。

とつあえず聞いてみるかな。

「えっと・・・マキナさん、ゾンビ達にあつてないんですか?」

「ゾンビ?」

俺が聞くとマキナさんはまた首をかしげた。

え?ひょっとしてマキナさんは、今の惨状を知らないのか?

「あのマキナさん、今街で何が起きてるか知っていますか?」

「いいえ、知らないわ。

さつきから聞こえる音と何か関係してるの?」

・・・知らない?何で?いくらゾンビを見てなくとも街がどうなつてるか位は分かる筈なのに・・・
まあ知らないなら教えるか。

「良いですかマキナさん。今街では

「

俺はマキナさんに今の状況とゾンビの事等を説明した。説明は長くなるから省略な。

「 って事なんです。わかりましたか」

「 隨分と大変だったのね。だったら今日はゆっくり泊まつていって

よつやく事態を呑み込めたマキナさんであった。

それにも、辺りが暗くなってきたな。よつやく夜の始まりだよ。

「じゃあ、案内するから付いてきて」

俺達はマキナさんの後をついていった。

「しかしマキナさんは物凄い美人だな」

俺の隣にいた変態の祐介がそんな事を言つてきた。まあ否定はしねえけどな。

「ああ、やうだな」

俺はめんどくさいから適当に流した。

「妻持ちの光治は、もう他の女には興味が無いのか

「あのなあ、言つておぐがアレは楓が勝手にしたことで俺は認めたわけじやねえからな」

まったく、本当にめんどくさい・・・

祐介と話してたら神社の前に着いて、そして中に入った。靴を脱いでからまたマキナさんの後についていった。

しかし広いな。まるで迷宮のようだから迷つたらどうしようつ・・・
しばらく歩いてると廊下のど真ん中でマキナさんが止まつた。

「男性陣は右の部屋で女性陣は左の部屋ね

「わかりました」

俺はそう言つてとりあえず右の部屋の襖を開けた。

部屋を見て最初に思つ事は・・・

「広い・・・」

俺はおもわず思つてた事を口に出した。
多分一人位は、この部屋で寝れるよ。

「じゃあ私は晩御飯を作るからそれまでゆづくつして」

マキナさんはそう言った後、俺達を残して迷宮と書つた廊下を歩いていった。

やつぱり住んでる人は迷つたりしないのかな?

「さてと、マキナさんが来るまで俺は寝せておひつか

隆二はそつと右の部屋に入つていった。

「じゃあ、ゾンビの脅威が一時的に去つた訳だし、今日はゆづくつするかな」

「それもそうね。
アタシはもうクタクタよ」

俺が言つた事に鈴木は賛成らしい。

そして、俺達男子はさつき隆二が入つた右の部屋に、女子は左の部屋に入つていつた。
なんか楓が嫌そうな顔をしていたが俺は気にはしない。
ちなみに、コンビニで集めた食料は一応均等に分けといった。

「さてと、特にやることはないから俺も寝るか

俺は仰向けになつて目を閉じた。

物凄く疲れてたから直ぐに夢の世界にトリップした。

「…………て…………さ……」

「…………う…………じ……」

何だ？誰かの話し声が聞こえる……

「…………アタ…………に…………せて…………」

何か言つてる様だけど、まったく聞き取れない……

「起きなさいよバカ！」

「グフツ……！」

腹の辺りの激痛によつて俺は覚醒した。
そして起きて最初に言つた言葉は

「いってえええええ……！」

俺は痛みのあまりに、腹を押されて転がつた。

「アンタがさつさと起きないからアタシが起こしてやつたのよ」

「鈴木、お前があ・・・」

「どうやら鈴木が俺の腹に何かをしたらしい。」

さすがはオ刀ではないのは分かる
たゞでオ刀たゞたゞ今頃三途の
川にいるからな。

となると、大体予想はつく。

「お前、思い切り踏みつけやがったな・・・」

「アンタがいつまでも寝てるからじゃない」

やつぱり足か・・・・

俺は心の中でフーヴーみたいに叫んだ。

「すまないな。私は必死に止めようとしたんだが」

「仕方ないだろ、だつて鈴木何だから」

何か楓が謝ってきたので、俺はとりあえず許した。すると

「一九四九年十月一日の新中國は、人民民主の共和国である。」

「おお、ナイスシッ！」

俺は鈴木のツツコミに思わず感心した。

「アンタ、いい加減にしなさいよ・・・」

そう言つた鈴木が手に握つた物は・・・・バット！？

「待て待て待て！俺が悪かつたからバットを置いてくれ！そんな物食らつたら三途の川に転送されるつて！」

俺は必死にバットを構えている鈴木に謝る。
何か世紀末のザコ敵が言いそうな感じだが、そんな事は言つてられない。
俺の命が危ないから！

「つたく、しようがないわね今回だけだからね」

鈴木はそう言つてバットを置の上に置いた。
た、助かった・・・

アレ？何で俺を起こしたんだっけ？

「なあ、何で俺を起こしたんだっけ？」

俺は気になつた事を聞いてみた。

「夕食が出来たからマキナさんに行つて頼まれたのよ」

俺が聞いたことに鈴木が答えた。

「あれ？お前ずっと部屋にいたんじゃなかつたのか？」

「やることないから、アタシ達はマキナさんの所に行つて料理を手伝つてたのよ」

「え？手伝つた？あの迷宮みたいな廊下を歩いてマキナさんを探したのか？」

「凄いな。よく迷路みたいな廊下を歩いてマキナさんを見つけたな

「違うわよ。すぐそこにある廚房があるのよ

鈴木はそのまま厨房へと歩いて行つた廊下を指した。

「ああ、なるほどね

ようやく分かりました。

鈴木達はすぐそこにある厨房に行つてマキナさんの手伝いをしたといふ事です。

「わかつたなら早く行くわよ。マキナさん待つてるし

「やうだな

そして俺達一行はマキナさんが待つてゐる厨房へと向かつた。

女性陣全員で料理したのか・・・もしも、兵器を作る奴があの中にいたらどうなるんだ・・・？

と考えていたら厨房に着いた。まあ、すぐ近くだからな。

どうやら厨房は洋室の様な造りになつてゐるらしく、真ん中に置かれてゐるテーブルの上には今日の夕食が置かれている。

白飯、味噌汁、ホウレン草のお浸し等々と言つた和の料理が並んでいてどれも皿そだ。

そしてそこには、マキナさんが椅子に座つて待つてゐたようだ。

「何だか大きな声がしていたけど、大丈夫だったの？」

マキナさんが大きな声＝俺の声が気になつたらしく聞いてきた。
それに対して鈴木は大丈夫と答えた。

「そりなの？ だつたら夕飯にしましょ。 適当な所に座つて」

俺達はとりあえず空いてる席に適当に座つた。
ちなみに席順は時計周りで

マキナさん、綾香、楓、俺、鈴木、隆一、祐介、吉彦、光太、葵
となつてゐる・・・・アレ？ 何で俺だけ女に挟まれてるんだ？

「いただきます」

マキナさんは両手を合わせてそう言った。

他の皆もマキナさんと同じ事をした。

俺も皆と少し遅れて両手を合わせて、とりあえず近くにあつた秋刀
魚を食べる事にした。

秋刀魚の身を取つて、口の中に入れた。さて、お味の方は・・・

「う、美味しい」

あまりの美味さに思わず口に出した。

「氣に入つてくれたの？ ありがとうね」

マキナさんはそつ言つて二ココと微笑んだ。

その綺麗な笑顔を見た俺は思わず目をそらして

「い、いえ」

と言つた。

今まで会つた女の中でもマキナさんは一番綺麗な笑顔を持つていると
思つ、俺的には。

何だらう？俺の両隣から何か殺氣の様なのが・・・

「ねえ、何でそんな顔を赤くしてゐるのかしら？」

「光治、私とてう最愛の妻がいるのに浮氣か？」

両隣にいた鈴木と楓が質問してきた。

二人共！何か黒いよ！黒いオーラが出てるつて！

「あら？楓ちゃんと光治君は夫婦だったの？」

マキナさんが楓に気になつた事を聞いてきた。
てか、マキナさん！今そんな事を聞いたら、”楽しい食卓”が下手
したら”鮮血の食卓”に早変わりしちゃうから！

「はい、私と光治は昨日婚姻届を出して正式な夫婦になつたんです

「あらそつだつたの。

これからも末長くお幸せにね」

「ありがとつゞります」

おおー！マキナさんのおかげで黒いオーラが一つ消えたぞ！
でも、あと一つのオーラは・・・消えてない。

消えるどころかオーラがさつきより強大になつてゐるじゃないか！

「ちよつと待つてて下さこね」

マキナさんはそのまま厨房から出ていった。

一体何処に行くんだ？

「ねえ、なんでアンタはさつきからマキナさんばかり見てるのかなあ？」

鈴木さん！怖い！怖いって！その感情を変えずに質問していくの怖い！

「い、いや、あの、」「ヒツー！」つて、え？」

鈴木がいきなり怯え出したから何かと思つと、鈴木の首に刀が当たっていた。木刀ではなくちゃんとした真剣。その刀を持っている人は・・・・マキナさんだった。

「李奈ちゃん、食事中は殺氣を蔓延させないでほしいの。わかつた？」

「は、はい・・・・」

「わかつたわね？今度食事中に殺氣を出したら・・・・この刀を勢いよく引きますからね」

マキナさんは鈴木に警告をしてから鈴木の首から刀を離した。何？今の絶対零度の空気は・・・・マキナさん怖すぎるので、そして刀を鞘に納めると

「わかつてくれれば良いのよ」

いつものマキナさんに戻つて、「一回りと微笑んだ。

よし、今のは”裏マキナさん”と命名しよう。

その後は勿論、しばらくは沈黙が広がっていたが、楓のおかげで沈黙が消えた代わりに俺は楓に口移しをやられた……

そして、色々な事があつた夕食は終わつて今はマキナさんが出したお茶を飲んでいる。

「ああ、美味しい……」

「ありがとう」

俺が言った事に、マキナさんは礼を言って微笑んだ。

笑うと綺麗なのになあ・・・まあ完璧な人間なんていないからな、誰だつて欠点とかはあるさ。

さてと、そろそろ情報でも集めるかな。

こうじつた事態になつたんだから、情報はなるべく新しい方が良いだらう。

「マキナさん、テレビつけてくれませんか？」

「ええ、いいわよ」

俺が頼むとマキナさんはリモコンを取つてテレビを着けた。当たり前だけど、地ジ化はしてあつた。

そして、早速テレビに映つたのは・・・お花畠でした。しかも画面の中央には「じょらくお待ちください」との文字がある。

「ちょっと、リモコン貸してください」

俺はマキナさんからリモコンを渡されると、チャンネルを変えていった。

どのチャンネルもお花畠だつたが、1チャンネルだけは違つた。

俺達はテレビの画面に釘付けになつた。

『現在、暴動は中部、東北地方の一部まで拡がつていて、警察は事態の鎮圧を行つています』

『暴動！？そんな生易しいもんぢやないだろ！人が人を喰つてるんだぞ！』

『今日は国立感染症研究所の研究員の後藤昌義さんに来ていただきました』

とキヤスターが言つた後、白衣を着た初老の男性にカメラが回つた。

『後藤さん、この暴動が起こる前に危険なウイルスが盗まれたとあります。そのウイルスは人体にどのような危険を及ぼすのですか？また、そのウイルスと今回の暴動に何か関連性はあるのですか？』

『実はそのウイルスの事は謎に包まれていて私にも全くわかりません。

ですから、今回の暴動にウイルスが関連してると決まったわけではありません』

『なんだよ、使えねえ研究員だなあ』

「光治、お前つてたまに酷い事言つよな」

俺がテレビに出でている研究員に対して言つた事に祐介が突つ込んできた。

「これでもまだ軽い方なんだからな。でも、これより酷い事を言つと多分マキナさんに殺られるからな。」

『バーン！』

『な、なんだ！？お前達は！今は撮影せや、やめろ！グギヤアアアアアアー！』

どうやら局にゾンビが入つてたらしく、あつといつ間にスタジオはゾンビによつて血まみれになつた。俺はテレビの電源を切つた。

『今の方々が、その”ゾンビ”つて方なの？』

マキナさんが俺に聞いてきた。今の方々？？？ああ、スタジオに乱入してきた奴等の事か。

『はい、今のスタジオに入つてきたのか”ゾンビ”です』

俺は質問に答えると、マキナさんは難しい顔をした。やつぱり、みんなのを見たら最初は誰だつて動搖したりするよな。

『人の肉なんて食べて美味しいのかしら・・・』

『あれ？何か違う、何か他の人と違うよー
やつぱり、皆も驚いた顔をしている。』

『あら～皆さんどうかしたの？』

『…………な、なんでもありません！大丈夫です！』

「 」「 」

「別に・・」

マキナさんが俺達の表情に気付いたらしく聞いてきたから、俺達は大丈夫と答えた。隆一は俺達より少し遅れて答えた。
それにもしても、8人がハモるのは凄いな。

「そう? ならいいんだけど・・・・あ、そうだ。せっかくだからお風呂にでも入つてきたら?」

風呂? 確かに今日が最後の風呂になるかもしれないから、まあ良いか。

「じゃあ、そうさせていただきます」

「あら、家のお風呂は広いから此処にいる全員で入れるわよ」

それは風呂ではなく浴場と言つたですよ。

「いえ、全員は遠慮しちります・・・そ�だ、男が入った後の風呂なんて嫌ですよね?だからマキナさん達が先に入つてください。料理とかで疲れたでしょ?」

「ありがとうございます、光治君は優しいのね。じゃあ私達は先に入るからね」

「はい、風呂から上がつたら部屋に来てください。俺達はそこで待つてますから」

「分かりました。」

じゃあ、行きましょ'

マキナさんはそう言って、綾香、鈴木、楓、葵を半ば強引に連れて行つた。そして残された俺達男性陣は部屋に向かつた。

場所は変わつて俺達の部屋

今俺は部屋でダラダラしている。

祐介は”ゾンビ大典”とかいう奴を読んでいて、吉彦はベースを弾いていて、光太は仮眠をとつていて、隆一は外でタバコを吸つている。

さつきから女性陣の声が聞こえてくる。多分、女性陣の声がデかいが、風呂改め浴場が近くにあるんだろうが、はつきり言って俺は興味がない。

いきなり祐介は”ゾンビ大典”を閉じて吉彦はベースを置いた。

「今なら”アレ”をやるチャンスだ」

「やるんだな”アレ”を」

「イツらまさか”アレ”をやるのか？いやまてよ、もしかすると”アレ”じゃないかもしないから一応聞いてみるか。

「一応興味ないけど聞くぞ。何をするきだ？」

「何つて、そんなの決まつてるだろ」

「もうだよ。風呂を覗くに決まつてるだろ」

ああ、やつぱりね大体予想は付いてたよ。

「別に俺は止めはしないが一言言つておく。」命を大事にしろ』

「わかつた、じゃあ行つたくる」

うん、全然分かつてないね。『命を大事にしろ』といつのは「やめ」といた方が良い」と言う意味なんだけどなあ・・・。もう仕方ないね、逝つてらっしゃい。

そして祐介と吉彦は部屋から出でていった。
アホ一人が浴場に向かつてから少し経つと光太が目を覚ました。
そして、辺りを見回してから

「あれ?他の先輩方は何処に行つたんですか?」

俺に隆二とアホ二人の計三人の行方を聞いてきた。

「隆二なら外でタバコを吸つてる。後の二人は・・・・そう、地獄に逝つた」

「そうですか・・・え?地獄?」

光太、お前はまだ分からなくて良いんだ。

光太がさつきの”地獄”について考えてると隆二が戻つて來た。

「今さつき祐介と吉彦が廊下を歩いてたが、アイツ等何処に向かつてたんだ?」

「ああ、多分地獄だろ」

「なんだ地獄か」

「何で平然としてられるんですか・・・」

俺と隆一の平然としたやり取りに対し、光太は啞然としていた。
その後一人の悲鳴が神社中に響きわたった。
マキナさんがいるから止めた方がよかつたのに。

しばりくすると、浴衣姿の女性陣が縄で拘束されている氣絶した祐
介と吉彦を連れてやつて来た。

「ちよつとー何でこの変態ロンビを止めなかつたのよー」

鈴木が真っ赤な顔で怒鳴つてきた。すい剣幕だな・・・

「警告はしたぞ、でもそのアホが理解しなかつただけだよ」

確かに俺はちやんと警告はした、”命を大事にしろ”とちやんと言
つた。

「・・・ハア、今度からはこの変態達が理解出来る言葉で警告し
といて」

「わかったよ」

どうやら鈴木は俺の言つた事に呆れたらしく、注意だけして、この
事件は終わった。

「じゃあ俺らも入つてくるかな。そのアホ達が起きたら浴場に行けつて言つといてくれ。じゃあマキナさん、浴場までの案内を頼みます」

俺と隆一と光太の三人はマキナさんについていった。もちろん入浴場面は全面カットだからな。

男のなんてただ気持ち悪いだけだからな。

そして、浴場から出た俺達（祐介と吉彦は今流済）は特にすりとはなかつたので、部屋に戻つて布団をだして直ぐに寝た。

朝になつたらしく俺は偶然顔にさしこんできた日の光によつて起された。布団から体を出そつと動くと、足が何かに当たつた。

「なんだ？」

俺は恐る恐る掛け布団をめくるとそこには・・・・楓がいました。浴衣が崩れて何かセクシーだな・・・・って、なんで居るんだよ！――

「・・・・う・・・・うう」

どうやら楓が目を覚ました様だ。

「光治か・・・おはよつ・・・」

「おはよつじやねえよ・・・何でお前が俺の布団に入つてるんだ

？」

俺は何故楓が此処にいるのか聞いてみる。

「確か……夜中に一回起きてトイレに行つたのだが……それから覚えてなくてな……まさかお前が此処に運んできてくれたのか！？」

「いっとくが、俺は一回も起きてないぞ」

楓が何か勘違いをしていたので俺は一回も起きてないと叫んだ。

「そうか……じゃあ、おやすみ！此処で寝るんじゃないな、なんだ？」

楓が寝ようとしたから、俺は浴衣を掴んで寝るのを阻止した。

「寝るなら部屋に戻れ」

「別に良いじゃないか。私達は夫婦なんだよ！部屋に戻れ！」ケチ。

・

俺がもう一度言うと楓は仕方なく布団から出て自分の部屋に戻つていった。俺はどうあえず布団から出て厨房に向かつた。

厨房には……誰もいなかつた。

俺は水道の水で顔を洗つて部屋に戻らうとしていると、偶然木刀を持ったマキナさんと出会つた。

「あり光治君、おはよ。此処で何してるの？」

「おはよございます。」

日射しに起されたんですよ

「それはついてないわね。あそここの部屋は朝になると一ヵ所だけいつも日射しが差し込むのよね」

「ああ、不幸だ……」

「やうなんですか。

マキナさんは何をしてたんですか？」

「私はちょっと道場で素振りしてたのよ」

マキナさんは持っていた木刀を俺に見せながら答えた。
つか道場つて、この神社どんだけ広いんだよ……つて、あれ?この木刀つて

「その木刀つてひょっとして、鈴木の木刀ですか?」

「そうよ、李奈ちゃんが寝てる時にこいつ借りたの。李奈ちゃんの寝顔可愛かったわよ」

「そ、そうですか……」

寝顔はあまり興味はないけど、こいつ借りたって、巫女さんがそんなことして良いのかよ……

「そういえば私が起きた時、楓ちゃんが見当たらなかつたんだけど、知らない?」

「楓なら、さつきまで俺の布団に入つてしまつたけど今は部屋に戻りましたよ」

「あらあら、熱愛ね

「違いますか？」

違うからね、あれは楓の奴が勝手に俺の布団に入り込んで来たんだからね。

「じゃあ俺は他の奴らを起こしてくのこれで」

「じゃあついでに李奈ちゃんに木刀返しといてね。あと、起きてたら「木刀借りてたわよ」と伝えといてね」

俺はマキナさんに鈴木の木刀を渡された。

「わかりました」

俺はそう言って厨房から出て女性陣の部屋に向かった。そして部屋の前に着いた。

本来なら入れない禁断の間だが、俺はただ木刀を置くだけだからな。言つておくが、別にやましい事は考えてないからな。

俺は襖をゆっくりと開けた。

部屋にいる全員はぐっすりと眠っていた。

えっと鈴木は・・・いた。しかもよりによつて奥の方かよ、不幸過ぎるつてこれは・・・
俺は比較的安全なルートを通つて行き何事もなく鈴木の所に辿り着いた。

鈴木は静かに寝息を立てていた。

『李奈ちゃんの寝顔可愛かつたわよ』

ふと、マキナさんが厨房で言つた言葉が頭の中に出てきた。
違う違う、目的は木刀を置くだけだ、木刀を置いたらさつと出
いけば行くだけだ。

俺は鈴木の枕元にそつと木刀を置いた。

よし、これで大丈夫。後は部屋から出るだけだ。俺が引き返そつと
した瞬間

「・・・・・う・・・・・う・・・・・」

と後ろから声がした。

俺が振り返るとそこには・・・・・鈴木が起きていた。
鈴木と目が合い少しの沈黙の後、顔を真っ赤にして

「キヤ ソ 「静かにしろ」 つ！」

叫びそうになつたから俺は咄嗟に手で鈴木の口を塞いだ。
まずいな・・・・とりあえず理由を言おつ。

俺は自分の口の前に人差し指を立てた。要するに「静かにしろ」と
かそういうたジェスチャーみたいなもんだ。

俺のジェスチャー（？）を見た鈴木が頷いたから俺は鈴木の口を押
さえていた手を離した。

「ちょっと、なんでアンタが此処にいるのよ

鈴木は小声で聞いてきた。やつぱり、そつくると思つていたよ。

「先に言つておぐが、俺はアホコンビと違つてひやんとした理由が

あるからな。」「

本當だ。俺は祐介と吉彦のアホコンビの覗き未遂（未遂に終わつたのかは知らないが）と違つてマキナさんに頼まれてるからな。

「わかつたわ話して」

「俺はその枕元にある木刀を置きに来てただけなんだ。その木刀をマキナさんが使ってたらしくて、さつき偶然会つた時に頼まれたんだ。ちゃんと伝言もあるからな」「木刀借りてたわよ」ってマキナさんが言つてたからな」「

「わかつたわ、そうよね。昨日の夜にあの一人に警告したアンタがそんな寝込みを襲つたりする奴じやないわよね」「ね

どうやら鈴木は信じてくれた様だ。

まあ事実だしな。もし信じてもらえてなかつたら、今頃ぶちギレつたな。

「じゃあ目的も果たしたから俺は出るよ。そうだ、俺が出たら二人を起こしてくれよ」

「わかつたわ

俺は行きと同じルートを通つていつて、襖の前に行き襖を開けて部屋から出た。部屋から出ると、偶然廊下に出てきていた隆一と会つた。起きてたんだ。

「お前何してたんだ?」

「俺はただ、マキナさんに頼まれた事を果たしていただけだ

隆一が聞いてきたから俺は正直に答えた。

「ふうん」

隆一は興味をなくしたらしく、部屋に引き返そうとした。

「隆一、部屋に戻るついでに他の三人を起こしててくれねえか？」

「ああ、わかったよ

「わるいな

そして隆一は襖を開けて部屋に入った。さつき「面倒くせえ」と聞こえた様な気がしたが、きっと『のせいだらう』俺は再び厨房に向かつた。

その後は全員で朝食を食つて、ゾンビ発生が夢じゃなかつた事を思い出した後、支度をしてマキナさんに神社の玄関まで送つてもらい今は玄関の前にいる。

「昨日は泊めてくれてありがと『ざきこ』ました

俺は神社に泊めてくれたマキナさんに礼を言った。

「別に良いのよ。

私も色々と退屈じてたから楽しかったわよ

「では、そろそろ行きますので」「そうね、行きましょつ」って、え

？」

「行きましょ、」つて、どうもひ事だ？マキナさんは残らないのか？

「マキナさん、神社に残らないんですか？」

「あなた達とこると樂しこから、私もついていきたくなつちやつたの」

「でもマキナさん、武器ほざけるんですか？今は持つていな様ですし」

・
俺は別に構わないよ。でも急いでるから待つてられないしなあ・・・

「それなら大丈夫よ」

マキナさんはそつ言つて靴入れの扉を開けると、そこには・・・
刀がありました・・・つて

「　　えええええ！」

俺と祐介、吉彦、鈴木、光太は驚いた。

おかしいだろ！何でそんな所に武器があるんだ！？そんなのバオ
ハードでしか通用しねえぞ！

「これで良いでしょ？」

「は、はあ・・・・・」

こうして俺達は北斗マキナさんを仲間に加えた。
俺達は玄関を出るとそこには危険が満ちていた。

そこには、銃と刀を持つたいかつい8人男達が俺達の方をガン見していた。

とりあえず警察じゃないとわかったから他の可能性を考えた結果・・

・・ヤクザだと分かりました。

俺達死んだな・・・

第9話　俺の周りは危険がいっぱい＝俺は不幸の塊（後書き）

御意見、御感想等お待ちしています。

第10話 警察署がソシエテ襲撃されてたって、お約束じゃね？（前書き）

今回は、ほんのちょっと短めです。
アクセス数が3000を越えました。読んでくださった方々、ありがとうございました。

第10話 警察署がソントク襲撃されてたって、お約束じゃね？

俺達今大ピンチです。

何故なら、マキナさんを仲間に加えて神社から出てみれば、なんと8人のヤクザ達がいるじゃないか！勿論刀、銃持ちです。

「お、おい光治どうするんだよ。ヤクザなんて話にならないう

「知らねえよ。

俺だつてどうしたら良いかわからねえんだ」「お、おい光治」「ん？何だよ祐介」

祐介が指を指した方を見ると・・・「わあ、ヤクザめっちゃ口芝チ見てるよ、いかついつて。

「光治、一体私達はどうなるんだ？」

楓まで、俺にどうするか聞いてくるのか・・・

「残念だが、こればっかりはもうもなによ

「さすがの光治もヤクザは無理か

無理に決まってるだろ。

ヤクザなんてゾンビの何倍恐ろしいって。
つて、やべえ・・・ヤクザがコッチに来やがった。

心臓バクバクだよ、俺達一体どうなるんだよ。

ヤクザ達はとうとう俺達の目の前に来た。

俺達どうなるんだ？此処で短い人生に終止符が打たれるのか！？
そんな事を考へてるとヤクザ達はいつの間にか隆一の前に集まつて
いて、そして思いもしない事が起つた。

「…………」「若ああああー！」無事で何よつてすー。」「」「」「

「

「おつ

・・・・え？ヤクザが隆一に頭を下げて、しかも若つて・・・どうなつてんの？

などと考えていると、ヤクザ達が今度は鈴木の元へ行くと

「…………」「お嬢も！」無事で何よつてすー。」「」「」「

「あ、ありがとう」

今度はヤクザが鈴木に頭を下げて鈴木がお嬢ー？

「おじ鈴木と隆一、一体どうひつ事だー？何でヤクザ達が頭をさげてんだ？」

俺は隆一と鈴木にどうひつ事かを聞いてみた。

「隆一はね、「坂本組」の組長の息子なのよ

「組長の・・・息子？」

「ナヒナヒ

「隆一、今の鈴木が言つた事つて本当か?」

「ああ」

どうやら、鈴木と隆一が言つてる事は本当の様です。つか、ヤクザが学校に通つても大丈夫なのか?・・・あれ? 鈴木が隆一がヤクザだと知つてるつて事は・・・

「まさか、鈴木もヤクザの親なのか?」

「ち、違うわよ。

ただ、お母さんが隆一のお父さんと友人だつただけだからね」

「つまり、お前の母親はヤクザと友人だつたと? 激しいな、お前の親は・・・」

「まあ、李奈の母親は昔最強のレディースで、俺の爺さんと李奈の婆さんも有名な不良で友人だつたからな」

「ちょ、ちょっと隆一!」

何でやうやうばらすのよ!」

はい、たつた今まで凄い事が判明しました。

隆一の爺さんと鈴木の婆さんは不良で友人。そして、隆一の父親(組長)と鈴木の母親(元レディース)も友人だと言ひことです。コイツ等どんな家系になつてるんだよ・・・

「若、お嬢! 昔話をしてる暇はありません。早く組長の所へ行きましょ!」

ヤクザの一人が隆二に組長つまり父親の元に行くようと言った。

「何でアイツの所に行かないといけねえんだ？」

「何故って、こんな世界になってしまったのですから、「坂本組」が一つとなつて此処等一体を手に入れるためだと組長は仰っていました。

さあ、他の奴らはまつておいて私達と組長の元へ行きましょう。

ひょっとして、隆二の組長つてかなりの野心家？
しかも、俺達はどうでも良いとね。

「おい、アイツに伝えてくれ

「アタシも隆二のお父さんに伝えたい事があるんだけど」

「はい、何でしょうか？」

「生憎、興味がないからアンタの野望に付き合ひはねえ。
夢を見ながら死ねとな」

「え？・・・・で、ではお嬢は？」

「アタシは仲間の方が大事なので貴方の元へは行きません。今の貴方は野心に取りつかれています」

「え？それはもしかして・・・・」

鈴木と隆二はお互の顔を見て頷いてから

「「俺はアンタ等と一緒にには行かない（アタシは貴方達とは行かないわ）」

と言つた。

「お願いしますー。どうか組長のミ失せん、一度と俺達の前に現れるな」も、申し訳ありませんーでは失礼します」

ヤクザは何とか説得をせようとしながら、「失せん、一度と俺達の前に現れ一人が他のヤクザに命懸をすると7人のヤクザ達は去つていった。しかし、こゝら組長の息子でも高校生に気迫負けするヤクザってどうなんだ？」

「せめて、これだけでも持つていてください」

残つたヤクザは隆一に刀と短刀を渡してから去つていった。

「い、行つたな・・・」

「ああ・・・って吉彦、何でやつてんだ？」

「な、何でひんな事を聞いたかって？それはね

え？何でひんな事を聞いたかって？それはね

「お前、足めつちや震えてるだ

俺が言つた様に、今の吉彦の足はめつちや震えてます。

「ち、違つたー。これは・・・楽しくて膝が笑つてゐるのや」

「　　」

お前は天草　ノカ・・・

勿論、今吉彦は皆から変な目で見られてる。

「頼む！そんな人を哀れむ様な目で俺を見ないでくれ！」

「自分で招いた結果じゃねえかアホ」

「出た、光治の毒舌シッ！」

吉彦は俺達から顔をそらして言った。そして俺は、そんな吉彦にツツコンだ。あと祐介、俺がいつ毒舌シッ！」をしたんだ？普通のツツコミじゃないか。

「そろそろ行くぞ」

「おい隆一、何処に行くんだ？」

俺は神社から出ようとしたら隆一を止めた。

「決まってるだろ、アイツが来る前にさっと遠くに行くんだよ」

「アイツって、お前の父親の事か？」

「そうだ。」

俺と李奈が来ないとなるとアイツは俺達を探すだろつな。もし見つかれば、俺と李奈以外は全員殺される

「・・・・・は？」

「先輩！今の事つて本当何ですか！？」

隆一の言つた事に対して光太が聞いた。

「ああ本当だ。

すぐに殺されなくとも、奴隸の様にコキ使われて結局は殺される。俺が今まで見てきた光景から、一つだけ言える事がある」

「「「「そ、それは？」」「」「」

「〔坂本組〕は最凶最悪の組だ。それに今はこんな時代だから女共は捕まつたら生き地獄を味会わせられる」

隆一の言つた事に俺達は絶句する。男性陣は隆一以外は即殺されか奴隸扱いされて結局死ぬ。女性陣は鈴木以外が生き地獄を味会わされるつて事は、強姦とかされちゃう訳だろ。

ヤバイつて！「坂本組」

「じゃ、じゃあ行くか」

「「ああ（ええ）」「」

「「「「・・・・・」「ク」「」「」

「なんだか楽しそうね」

隆一と鈴木は普通に返事をして、他は黙つて頷いた。つかマキナさん！？一人だけ反応がズレてるんだけど！そして俺達は無言のまま

神社を後にした。

そして、石段を降りてきて街に戻つて来た
俺達だが、昨日いたゾンビの大群が一夜にしていなくなつていたか
ら驚いた。

「い、いつたい何処に消えたんだ？」

「うーん……そうだ、きっとゾンビ達は私達を諦めて別の場所
に行つたんだよ。人がたくさんいる所とかに」

「おお、なるほど」

祐介と綾香のオカルトコンビが勝手に悩んで勝手に解決しているが
無視。

「……先輩、これから何処に行くんですか？」

葵が聞いてきた。

そつか、行くところなんて決めてなかつたな。

「やうだ」「警察署に行くぞ」つて、は？」

祐介がいきなり警察署に行くとか言いやがつた。割り込んできて何
言つてやがるんだ？このオカルトオタクは。

「だから警察署だよ。

警察署で銃とか警棒を手に入れればこの先楽になるだろ？特にゾン
ビや「坂本組」のヤクザ達に

なるほど、無闇に撃つとゾンビを引き寄せてしまう欠点はあるナビ、ヤクザ達にも有利だからな。

「祐介、その低脳で良く」ここまで考えたな、ナイスだ

「お前絶対褒めてないだろ！」

何か祐介がツッコミを入れてきたらしげ、そんなの気にしない。

「じゃあ、警察署に行くぞ」

場所は変わつて警察署前

俺達は出会つたゾンビを片つ端から潰していくとよつやく警察署前にいたんだけど、酷い有り様だった。

ゾンビは今の所見当たらないが、警察署前は地面に血や肉片などが撒き散らされていて、さらに何か小さい金属の筒の様な物が散らばつていた。

これが”薬夾”ってヤツなのか？ちなみに俺は軍オタでもミリオタでもないから、銃の種類なんてM16で出てきたの位しか知らない。撃ち方？知るわけないだろ。

そりいえば一つだけ気になる事がある。

「警察署が壊滅してゐるのに何とも思わないのって俺だけ？」

「いや、俺もだ」

「私も」

祐介と綾香は俺と同じようだ、しかもゾンビ映画を見た組だけだ。ゾンビ映画つてのは人をここまで変えてしまったのか・・・恐ろしい！

「とりあえず中に入るか」

俺達は警察署の中に入った。中はとても静かだが、やつぱり床や壁には血が付いている。

「じゃあ一歩に別れて武器を探すぞ」

俺がそつまつと階は頷いた。

そして

俺、鈴木、楓、綾香、マキナさん

隆一、吉彦、光太、葵、祐介

と5人、5人に別れた。

それにしても、何で俺以外が全員女性なわけ？神様は一体どんな修羅場を期待してるんですか？

「俺達は一階で探すから隆一達は一階を頼む」

「わかった」

「もし武器を見つけたり、何かあつたら携帯で連絡してくれ、良いな？」

俺が皆に聞くと皆は頷いた。そして隆一達のグループは一階に向か

つた。

それを確認してから俺達も行動を開始した。

第10話 警察署がソシエテ襲撃されてたって、お約束じゃね？（後書き）

御意見、御感想等お待ちしています。

第11話 遂に銃をGET！でも使い方分かんねえ（前書き）

一部編集しました

第1-1話 遂に銃をGET！でも使い方分かんねえ

俺、鈴木、楓、綾香、マキナさんといつ修羅場好き（？）の神様のせいで作られたグループで警察署一階を散策中。

「武器庫は何処だあ？」

俺はそう言いながら他の女性陣達と廊下を歩いている。

「ねえ」

「なんだ？」

後ろから鈴木が声を掛けたから俺はその場に立ち止まってから振り返った。

「固まつて行動してたら効率悪いと思つから、そりこ一手に分かれない？」

「確かに効率良くなるけど、ゾンビに遭遇した時は危険じゃないのか？」

「た、確かにそうだけど、アンタに反論されると何かムカつく

俺は普通の事を言つただけなのに鈴木にムカつかれました。理不尽すぎるって・・・

「だったら私は綾香ちゃんと一緒に別行動するから、三人で仲良くな

「わかりました……って、あれ？マキナさん、俺の話聞いてました？」

「聞いてたわよ。
でも私なら大丈夫だからね。ゾンビに出会つたら頭を攻撃すれば良いんでしょう？」

「は、はいそうですが、マキナさん戦つた事ないじゃないですか」

「大丈夫よ。

綾香ちゃんゾンビに詳しいんですね？」

「勿論、任せてくれ」

そう言つて胸を張る綾香であった。その自信は一体何処から出でてるんだ？

「じゃあ、向ひついで合流しましょ」

「は、はあ・・・・え！？ちよ、ちよつとマキナさん！？」

マキナさんは綾香と一緒に俺達が来た道を戻つて行つた。そして、残つたのは俺と楓と鈴木の三人だけ。ふざけるな神！…どんだけ修羅場好きなんだよ！何を期待してんだ！？と叫びたいが、今は我慢しきつ。

「じゃあ、武器とか探すか」

「さうね、此処で立つてもしょうがないしね」

「せうだな」

とつあえず俺達は再び武器を探すことにした。
そしてしばらく歩いてるとオフィスの前に着いた。どうやら鍵は開
いてるようだ。

「よし、入るぞ・・・と言いたい所だが、楓いい加減に離れる」

俺は扉を開ける前に、さつきから右腕に抱きついている楓に言つた。

「何だ？李奈いるから恥ずかしいのか？」

「いやそりゃなくて、もし開けた瞬間ゾンビが襲つてきたらどう
すんだ？俺達が真っ先に死ぬぞ」

「私は光治と一緒に死ねるならそれでいい」

「やうやく事言つたなー」

俺は楓の言つた事に思わずシッコリを入れた。

「ねえ、まだ？」

鈴木がなんかイライラしている。まずいな、下手すると刀を抜いて
斬りかかってくるかもしれないな。

ちなみに、ヤクザから貰つた刀は鈴木が、短刀すなわちドスは隆二
が持つているがちゃんとバットと木刀は装備している。

「ああ悪いな。

楓とりあえず今は離れてくれ

「仕方ないな」

楓はそう言つてやつと離れてくれた。そして俺はドアノブに手を掛けた。

「開けるぞ」

俺はゆっくりと扉を開けた。幸い開けた瞬間ゾンビに襲われて死ぬというシナリオは避けられた。

オフィス内はゾンビが10体位いた。その内の3体は警察だ。3体だけは制服を着ていたからすぐに分かつたつて、え？聞いてない？

俺達が中に入ると、1体が此方を向いたので気付かれた。

俺達は持っている武器を構えてゾンビに向かった。一番近い奴から頭を潰していく。3人だったから、あつという間に片付いて、俺達の周りには頭が潰れたゾンビが倒れている。

「じゃあ、俺はポリゾンビの武器を取るから一人は他に武器がないか調べてくれ」

「分かったわ」

「私は光治を手伝いたいのだが」

「大丈夫だ楓、もう一回死んでるからな。
ほら、早く調べてこい」

楓は不機嫌な顔をしながら鈴木とデスクを調べていった。

さてと、俺は警察から武器をパクるかな。別に死んでるから良いよね。そして俺は警察から警棒と銃を頂いた。

この銃はいわゆる”オートマチック”ってやツかな？

何で知ってるかって？それは、高一の時にもう転校したガンオタの奴がいて、色々と教えてくれたわけだ。まあ、銃の名前とかは訳分からなかつたけどな。

お、一人が戻ってきたぞ。

「どうだつた？」

「全然駄目だつたわ」

俺が聞くと鈴木は首を横に振つた。

「光治の方は？」

「ああ、警棒と銃をそれぞれポリゾンビの数だけ手に入れたぞ」

俺はそう言つて二人に銃と警棒を見せた。

「で、弾は入つてるの？」

「それを調べたいんだけど、銃の使い方なんて知らねえんだよ

「え？ 知らない？」

「当たり前だろ。

俺は軍オタでも銃オタでもないからな」

「じゃあ、その銃はどうするんだ?」

楓が聞いてきた。答えは勿論決まっている。

「一応持つておくけど、使い方知らないから今の所はただ持つておくだけだな」

「今はただの無駄な荷物ってわけね」

鈴木は呆れながらそう言った。まあ、銃の使い方なんて知らないから仕方ないだろ。

「じゃあ、もうこのオフィスは用なしだな」

「そうね」

「そうだな」

俺達は入ってきた扉を開けてオフィスから出た。
ちなみに銃と警棒は三人で一つずつ持つ事にした。

「あ、そういうえばマキナさん達は大丈夫かな」

「へえ、そんなにマキナさんが心配なわけ?」

「光治、浮気は許さないぞ」

ちょっと! ? 一人共目が怖い! 怖いって! 鈴木は何で刀構えてんの!< ? 何で楓は警棒を構えてんの! ? 何で警棒を当たり前の様に扱えてんの! ?

「までまでー誤解だ！」

だつてまともに戦えるのはマキナさんだけだけど、ゾンビと戦つた事ないんだぞ！いくら綾香が倒したかを教えてても危ないだろ！万が一死んでたりしてたらどうするんだー？」

俺が殺氣を放つ一人を必死になつて説得すると、納得したのか武器を納めてくれた。助かつた・・・・

「確かにそうね」

「否定はできないな」

光治達がマキナ達を心配している一方で、此処は一階の別のオフィス

グシャードサツ

「おお、マキナさん凄い凄い」

「やうかじら？あつがとうね」

そこにはゾンビを圧倒していたマキナとそれを見て興奮している綾香の姿があった。

「どうするの？移動する？」

「そうだな、此処で立ち止まつても意味ないしな」

「じゃあ、行くのか?」

「ああ、さつせとマキナさん達と合流するか

俺達が動こうとした瞬間
、持っていた携帯が鳴ったから俺は携帯を取り出した。隆一からの
電話の様だ。

「隆一、どうした?」

『光治か? 気を付けろ、此処の警察署は危険だ』

「危険? どうゆう事だ?」

『どうやら此処には普通のゾンビ以外の奴がいるらしい』

「ゾンビ以外の奴?」

『詳しくは分からぬ。だが気を付けろよ、下手したら怪物が潜んでるかもしねないからな。』

「ああ」

怪物かよ・・・ネシスとかリツーとかハターみたいなのだと
たら、俺達全滅じやねえか。

『一応聞くが、全員いるのか?』

『いや、マキナさんと綾香が別行動してい』『バカ野郎! 早く一人

「合流しやーー』 わ、わつ

隆一が急に携帯越しに怒鳴ってきた。

『いいか?合流したらすぐ二階に来い。分かつたか?』

「ああ、分かつた」

俺は携帯を切つて制服の胸ポケットこしまった。

「なんだつたの?」

「・・・不吉の兆候だ」

鈴木が聞いてきたから俺は少し間を空けてから答えた。

第11話 遂に銃をGET！でも使い方分かんねえ（後書き）

御意見、御感想等お待ちしています。

ちなみに光治達が手に入れた銃は「H&K P2000」

です

第1-2話 嫌な予感がしたらまづ疑え（前書き）

今回は主に隆一視点ですが、グダグダになつてしましました。アクセス数が4000を越えました。読んでくださった方々、ありがとうございます。

第1-2話 嫌な予感がしたらまず疑え

光治達がさりに一 手に分かれて武器を探してゐる時と同時に

俺達は今証拠品保管庫の前にいる。

「開いてるのか？」

祐介はそう言つて、ドアの取つ手を掴んだ。
そして取つ手を回してドアを押すと・・・・・開いた。

「どうなつてんだ？」この警察署は

吉彦は呆れでいて皆も頷いている。
まあ、誰だつて呆れるよな。

「じゃあ、入るぞ」

そして俺達は保管庫に入った。中は押収物が入つてると思つロッカーがいたる沢山あつた。ゾンビの氣配はなかつた。

「先輩、此処に武器があるんですか？」

「ああ、つい最近の事だがヤクザが捕まつたからな。銃くらいは保管してあるだろ」

そういうば、今話したヤクザって何処の組だつたけな・・・・・忘れ
た。

「じゃあ、とりあえず探すか」

俺はとりあえず手当たり次第にロッカーを開けていった。鍵が掛かってるヤツはどうしたか？勿論ぶつ壊したよ。ちなみに俺の収穫はナイフ5本だけだ。ドス持つてるからいらねえけど。

「・・・・先輩、こんなのは見つけました」

後ろに居た葵が何かを見つけたらしく呼んできたから振り返ると葵が火炎瓶を持っていた。

「火炎瓶は俺に渡して、光太と一緒に他を調べてくれ

葵は無言で火炎瓶を俺に渡すと光太がいるところに向かった。さてと、俺も探すかな。

「おいや、ちょっと来てくれ

「どうしたんだ？」

祐介が俺達を呼んでるから俺達は祐介の元に行つた。

「こんな物を見つけたんだ」

祐介はそう言って銃と数本のマガジンを見せてきた。

この銃は・・・例の捕まつたヤクザが持つてた銃かもな。

「じゃあ、今回の成果を見るかな。皆、見つけた武器を置いてくれ

「「分かつた（分かりました）」

今回の収穫は

ナイフ5本

銃1丁とマガジン数本

火炎瓶4本

か・・・・まあまあかな。

「じゃあ、とりあえず銃は俺が『隆一』、ズリィぞ」・・・何でだ」

どうやら祐介が俺が銃を持つ事に反対らしい。

「俺だつて銃使いてえよ

つたく、この銃はオモチャじゃなくて本物だぞ。何考えてんだ？

「お前使い方知らねえだろ。エアガンと違つてこれは本物だぞ」

「うつ・・・・・じやあ、隆一は使えるのか？」

使えるのか？ねえ・・・

俺は銃を手にとってマガジンを出して弾が入ってる事を確認してから装填した。安全装置は掛かってるか。安全装置を外して銃口を祐介の顔に向けた。

「これで引き金を引くとお前の頭に穴があく

皆は驚いていた。まあ、当たり前か。

「わ、分かつたよ。

隆二が持つてくれ」

俺は引き金から指を離した。ホルスターが欲しいが、今は我慢するか。

俺はベルトに挟んだ。

「そ、それにしても先輩は銃の扱いに慣れてますね」

「ああ、「マカロフ PM」って銃でな、ヤクザの基本武器の一つだ。

俺だつて一応ヤクザだから撃つたことはある」

「人をか！？」

「ちげえよ、練習用のためにだ」

「たく、吉彦の奴は何勘違いしてやがるんだ？
人なんて撃つてたら今此処にいねえだろ。

「葵、火炎瓶はバックに入れてといてくれ。ナイフは一人一本ずつ
だ」

俺達はナイフを一本ずつ取つた。折り畳み式だつたから刃をしまつてから制服のポケットに突っ込んだ。

葵は火炎瓶をバックの中に入れた。中には火炎瓶以外にコンビニで集めた食料の半分が入つていて、もう半分は綾香が持つているバックに入つていてる。

「じゃあ、他探すぞ」

そして俺達は証拠品保管庫から出て、廊下を進んだ。
しばらく歩くと

ドサッ！

部屋から物音がした。

その部屋は取り調べ室の様だ。

「な、何だ今の音は？」

「下がってろ」

俺はドスを構えてドアに近付いて、一気に開けた。

取り調べ室にはゾンビ・・・ではなく、血まみれの警官が壁に持たれかかりながら、片手で銃を構えていた。
ゾンビじゃないと分かり、ドスを納めた。

「ど・ど・ど・ら・生きてる奴・ら・い・な・」

警官はそう言って銃を下ろした。

首も血まみれの警官に釘付けになつていて、服がボロボロで、体のおひこから血を流している。

「あなた、ゾンビにやられたのか？」

俺が聞くと警官は首を横に振った。

「いいや・ゾンビなんて・生易しい・奴じゃ・ねえ

「どうゆう事だ？」

「ゾンビ……なんて……比べ物に……ならない……怪物だよ……」

「.

「怪物？」

何の事だ？此処にゾンビよりも危険な奴がいるのか？

「氣を……つけ……な……怪物と……会つたら……すぐ……逃げ……る」

警官はそう言うと腕がダランと垂れて銃が床に落ちた。俺はすぐに警官の胸に耳を当てた。心音はしていない。

「死んだ」

俺は皆にそう言った。

そして警官の銃を調べる、弾は……入ってるか。

俺は警官が持っていた銃

をホルスターごと取つて腰に着けた。マカロフは葵に預けとくか。さらに警棒を取つて葵にマカロフと警棒を渡したてから、携帯を取り出した。

電話の相手は

『隆一、どうした？』

「光治か？氣を付ける、此処の警察署は危険だ」

光治だ。

『危険？ どうやうつ事だ？』

「どうやら此処にはゾンビ以外の奴がいるようだ」

『ゾンビ以外の奴』

「詳しく述べは分からぬ。でも気を付けるよ下手したら怪物が潜んでるかもしれない」

『ああ』

怪物がいるとなると、全員いるか一応聞いてみるか

「一応聞くが、全員居るか？」

『いや、マキナさんと綾香が別行動していゝ』「バカ野郎！早く合流しきー！」お、おひ

俺は思わず怒鳴ってしまった。光太と葵が少しふくっとした。

「いいか？合流したらすぐ隣に一階に来い。分かつたな？」

『ああ、分かつた』

光治はそう言つて携帯を切つた。俺は携帯をしまった。

「直ぐに来た道を戻るぞ。そこで光治達を待つ」

俺が皆に指示を出すと、全員が頷いた。俺達は取り調べ室から出て来た道を戻つていった。

そして来た道を戻つて来た俺達はそこで光治達を待つた。

光治サイド

「不吉の兆候?」

鈴木は頭にクエスチョンマークを浮かべている。

「ああ、隆二が言つてゐる警察署内に「ゾンビ以外の奴」がいるらしい」

「ゾンビ以外って事は、この署内に怪物いるという事か?」

さすが元生徒会長、わかつてらっしゃるな。

「そうだ。だから、離れて行動するなって言われたんだ」

「でも、マキナさん達が別行動してるじゃない」

「だから、今すぐ会流して一階に行く

「でも、怪物とやらが現れたらどうするんだ?」

質問多いな・・・

「怪物が現れたら・・・勿論逃げる」

「まあ、戦つても死ぬのがオチだからね」

「やうだな

「じゃあ、早く合流するぞ」

そして俺達はポリゾンビの亡骸からホルスターをパクつてから、先に進んだ。勿論ダッシュで。しばらく走つてるとゾンビが2体いたから、さっさと処刑して先に向かつた。

またしばらく走つてると人影が2つ見えた。そしてそれがマキナさんと綾香だと分かつた。

「光治君達、そんなに急いでどうしたの？」

「マキナさん、綾香、一階に行くぞ」

「え？ 光治君何で？」

「じきに分かるから今は走るぞ」

「うん、分かつた」

そしてマキナさん達と合流した俺達はダッシュでロビーに向かつた。ちなみに鈴木は綾香に警棒を渡していた。

どうやら、一人はゆっくり行つたらしく、すぐロビーに着いた。

「階段は・・・あつた！ 登るぞ」

俺達は階段をかけ上がった。そして一階には隆一達の姿が見えた。

どれくらい時間が経つたか分からないが、しばらく待つてると光治達が階段をかけ上がつて来た。

ちゃんと全員いるか。

何だ？光治と李奈と楓は銃をホルスターにしまつていて、光治と楓は警棒も持っている。綾香の腰にも警棒があつた。

「警官の銃か？何処で手に入れた？」

「ポリゾンビから頂いたんだ。でも使い方が分からなくてな」

光治曰く、警官ゾンビから頂いた物らしいが、使い方が分からならしく宝の持ち腐れ状態になっている。

「お前もポリゾンビから頂いたのか？」

「いや、ついさっき死んだ警官から頂いた。バックの中にはヤクザが使っていた銃もある。

勿論使い方は分かる」

「そうか、じゃあ教えてくれ」

銃を使える奴は多い方が良いからな。それにしても、ポリゾンビって変な呼び方だな。

「分かった。じゃあとりあえず、光治から銃を見せてくれ。李奈と楓はその後だ」

「 「 「 分かった（ええ） 」 」 」

俺は光治から渡された銃を見た。安全装置は外れてる。弾は入ってるのか？

俺はマガジンを取り出した。弾は・・・・・あつた。つか一発も撃つてないとか有り得ねえだろ。

俺はマガジンを装填して光治に返した。

「あとは狙つて引き金を引くだけだ」

「悪いな」

光治は銃を受け取つてホルスターにしまつた。

その後、李奈と楓が持つていた銃も同じ様に調べた。李奈が持つていた銃だけは弾が入つていなかつたから空マガジンだけ取つて、銃本体は階段に投げ捨てた。

「なあ隆一」

「なんだ？」

「さつき電話で言つてた「ゾンビ以外の奴」の事、どこで知つたんだ？」

光治が「ゾンビ以外の奴」、つまり死んだ警官が言つてた怪物の事を聞いてきた。そういうえば、どこで知つたのかを話してなかつたな。

「取り調べ室にいた瀕死の警官から聞いたんだ。もう死んじまつたけどな」

「さうか、じゃあ早く此処から出るか

俺達が一階に行こうとした時、下から

ドスン！ドスン！

と何かの足音がした。

光治サイド

何だ今この足音は？一階からしたな。凄く嫌な予感がする・・・
俺は気になつて一階から一階を覗いた。

「おーおー、マジかよ・・・」

俺は思わずそう呟く。

一階には、確かに「怪物」がいた。

第12話 嫌な予感がしたらまず疑え（後書き）

御意見、御感想等お待ちしています。

第13話 現実でタイント系の奴が現れたら高確率で死ぬ（前書き）

またグダグダになつてしまひました。
本当にすいませんでしたm(_ _)m

第1-3話 現実でタイント系の奴が現れたら高確率で死ぬ

一階には確かに「怪物」がいた。

いや、「怪物」というよりは人に近いチホンよりも明らかにカイ奴がいた。

黒いコートを着ていて、服装は黒で統一されている。スキンヘッドで手袋をしているが、片方は巨

大な爪が生えていた。

間違いない。絶対アレだろ・・・

「な、なあ祐介」

「どうした光治？ そんなに汗かいて」

「いや、ね、一階にタイントと同族の奴がいるんだけど・・・」

「はあ！？ そんな馬鹿な。
此処にタイントと同族の奴がいる訳ないだろ？」

俺は本当の事を言つたのに祐介は冗談だと思つてゐらしく、いつもの態度で一階を見た。すると祐介が動きが止まつた。絶対見たな。祐介はゆっくりと此方に振り返つた。

「ど、どうしようつ・・・タ、タイントと同族の奴と目があつちやつた・・・」

「目が合つた？」

「そつか、今すべき事は一つだけだな」

「なんだ？」

隆一が聞いてきた。
そりや、アレに決まつてゐるだろ。

「逃げろおおおおおーーー！」

俺は大声で叫んだ。

祐介は真つ先に廊下を走つていった瞬間

ドガアアアアアンーーー！

タイントと同族の奴が一階からジャンプしてきて、今さつきまで
祐介が居た所をぶつ壊していた。
勿論、片腕に巨大な爪を持つた奴を見たら誰だつて驚く。皆は真つ
先に廊下を走つていった。
俺と隆一は少し遅れて皆の後を追つた。

「なんなのアレー？アンタ説明しなさいよー！」

「アレはタイントと同族の奴に決まつてんだろうが！」

「そのタイントってなんなのよー！」

「一言で言つと”最強の敵”だ！」

クソッ！なんでこんな序盤からタイントと同族の奴が出てくるんだ！？

此処はバオ2の裏シナリオの警察署ですか？アレはゲームだから

一発で死なないだけで、実際に食らつたら死んじまつて！

ドサツ！

何かが倒れる音がしたから振り返ると楓が倒れていた。あれ？いつの間にぬかしてたのか？・・・じゃ無くて！早く助けないと！俺は楓の元へ向かつた。

「すまないな光治、足をくじこちやつたらじい」

「いいか楓、動くなよ」

楓は仲間だから死なせたくない。でも、アレをやると後々厄介に・・・
・後の事より大事なのは今だ！

やるしかない！

俺は楓を抱き抱えた。

今、俺は楓をお姫様抱っこしている。

「やうか、やつと認めてくれたのか。私とお前が夫婦だということを」

「違う、お前が足を挫いたから仕方なくやつてるんだ」

「光治は素直じゃないな。まあ、私はお前のそつぬう所も好きだが
な」

「つるせえ」

俺は楓をお姫様抱っこしたまま走った。正直言つて物凄くキツイです。こんな事したの初めてだし、腕がメッチャ痛い。

でも、落としたら楓は殺される。それだけは絶対に避けたい。

俺は必死に走る。

廊下を曲がると、そこには皆が待つていてその後ろには扉があった。何かの部屋なんだろ？

「早く来い！」

祐介が大声で呼んでくる。おいおい、俺は楓を抱えて走つてんだぞ！これが精一杯だ！

「どけ！」

突然知らない人の声がした。そして部屋から一人の警官が出てきて俺の方に走つてきた。警官はすぐに俺の所に着いた。

「その娘は俺に任せろ！」

「え？あ、あなた！」「さつさとしろ！死にてえのか！？」わ、わかりました」

俺は楓を警官に預けて皆の所に走つた。

後ろには今のところ、楓を抱えた警官しか見えない。そして俺は祐介達がいる所に着き、少し遅れて楓を抱えた警官が来た。

「早く入れ！」

警官は俺達に向かつて怒鳴つてきたから、俺達は急いで中に入った。そこには、他の警官が3人いた。楓を抱えた警官は中に入ると楓を床に降ろしてから扉を閉めた。

そして部屋にいる全員に見える様にして人差し指を口に当てた。

皆は警官がしたジョスチャーの意味を察知したらしく、その場で立ち止まつた。

ドスン！ドスン！

とさつきのタイントと同族の奴の足音が聞こえてきた。
そして、しばらべじつとしてると足音は段々遠ざかっていつて聞こえなくなつた。

「もう大丈夫だ。
自己紹介が遅れたな。俺は工藤俊明、この警察署の警官だ。よろしく」

脅威が去つたから、さつき楓を抱えた警官 工藤さんが自己紹介をした。

「俺は片岡光治、高校生です。楓の事ですか？ ありがとう」「まし

た

俺も工藤さんに自己紹介をして楓の事の礼を言つた。

「あの娘の名前、楓って言うのか。お前の彼女か？」

工藤さんが扉の前にいる楓を見ながら彼女なのかと聞いてきた。すると楓が口を開いた。

「違う、私と光治は夫婦だ」

「へえ、随分と早い婚約だな」

楓が言つた事に工藤をさせ笑いながらそつと笑つた。どうも言ひすぎだ。

「信じてないな。私は一昨日やんと婚姻届を出したんだ。そりだらう? 光治」

言じてからなーからって、俺にふつてあがつた。

「本当か?」

工藤さんが聞いてくる。

「は、はー一応・・・」

「やうか、凄いなお前達は。もう婚約済みか」

なんだろ?、褒められても全然嬉しくない。いや、楓が勝手に出しあたんだから嬉しくなれない。

「ねえ、アタシ達の事忘れてない?」

どうやら鈴木が痺れを切らした様だ。

「お前も参加するか?」

「別に参加したいわけじゃないわよ。」

あれ?違つか?

「おー、あの”シンデレ”嬢ちゃんもお前の仲間か？」

「はい、さうですけど……って、工藤さん今何て言いました？」

？」

「あ？ お前の仲間か？って聞いたんだよ」

「違います。その前の言葉です」

「”シンデレ”って言つたけど、それが何だ？」

”シンデレ”だと！？

ヤバイ！下手したら工藤さんが危ない！

「ねえ光治、その工藤て人をちょっと取り押さえといでね」

ヤバイ！メッチャキレてるつて！後ろから黒いオーラが吹き出てる
つて！刀構えてるつて！

「お、落ち着け」

「アタシは”シンデレ”じゃ」「止まれ！」」「つい！」

鈴木が工藤さんに斬りかかるつとした瞬間、他の警官達が鈴木の頭
に銃を向けていた。鈴木は仕方なく刀を納めた。
だが、まだ黒いオーラが吹き出している。

「工藤さんは始めてまだ禁句の事を知らなかつたんだ。仕方ないだ
ろ」

俺は鈴木を説得をさせる事にした。すると吹き出していた黒いオーラが弱まってきた。

「お前ら、銃をしまえ」

工藤さんが指示を出すと、鈴木に銃を向けていた他の警官は銃をホルスターにしまった。

「すまねえな嬢ちゃん。」アレ”が言つちやいけない事だとは知らなかつたんだ」

工藤さんは鈴木に謝つた。工藤さんは知らなかつたから仕方ないけど悪いと思つたから謝つたんだろう。

「し、仕方ないわね。今回だけは許してあげるけど、次言つたら絶対に殺してゾンビの餌にしてやるからね」

鈴木は工藤さんを許したが、さりげなくどんでもない事を言つた。殺してゾンビの餌にするつて、どんだけ嫌なんだよ。

「とりあえず一見落着だけど・・・鈴木、楓、年上には敬語を使えよ。それでも元生徒会か?」

「す、すまない」

「わ、悪かったわね」

「別にタメ口でも敬語でもびつちでも良いでぞ」

あれ?別に良いんだ。

「せうこえば、一つ聞きたい事があるんだが」

「はー?」

聞きたい事? 何だろ?。

「誰か警官を見てないか? わりと出ていったきり戻って来ないんだよ。多分まだこの階にいる思ひただが……誰か知らないか?」

いやいや、此処警察署だからね。沢山警官いるからね。

「ゾンビ化してる奴しか見てないですけど」

俺はこの警察署で見た生きた警官は今のところ藤さん達だけだからな。

「せうか、じゃあそいつ溜まつてる方で知ってる奴いるか?」

「私は知らないわ」

「せうからキナさんもゾンビしか見てない様だ。」

「せうを取り調べ室で瀕死の奴と会つたぞ」

「本当か…?」

「ああ、怪物に氣をつかると書いて死んだけどな」

隆一の奴、もう死んだとはいへ、よく生きている警官に会えたな。ま

あ、今生きてる警官の前にこぬナビ。

「やつか

「コレはソイツが持つてた銃だ」

「すまないな」

隆一はホルスターから銃を取り出して工藤さんに渡してから、もう一つの銃をホルスターにしました。

「工藤さん、これからどうするんですか？」

「そうだな・・・とりあえずアレがまた来ないといひに此処から出た方が良いかもな」

「そうですか。じゃあ早くい

ドガアアアン！――

俺が「早く脱出しよう」と言いかけた瞬間、いきなり何かが壊れる音がしたからその音がした方向を見るとそこには・・・タイントと同族の奴がいた。幸い誰も殺られてないが一番危険なのは足を挫いた楓だ。

「工藤ー早く逃げろ」

他の警官達はタイントと同族の奴に銃を向けて逃げるよつて言つた。

「で、でも

「いいからはやく」

警官の一人が巨大な爪に腹を貫かれた。

「クソー！ 早く逃げろー！」

俺は楓の肩を担いで部屋から出た。

そして工藤さん以外の警官を除く全員が部屋から出て走った。俺も足を挫いた楓と一緒に走っている。

後ろからは銃声がするが、やがて聞こえなくなつた。その時には階段に着いていた。階段では楓を抱き抱えてゆっくりと慎重に降りていつた。

そして一階に降りて一々降ろしたりするのは面倒だから俺は楓を抱き抱えたまま頑張って走った。

そして俺達は警察署から無事脱出した。

工藤さんは辺りを見回している。そして何かを見つけたらしく、そこに向かつて走つた。その先には機動隊が乗つているあの車があつた。

「此方だ！ 早く来い！ ！」

皆はすぐに工藤さんの所に着いて俺は遅れて工藤さんの所に着いて車に楓を乗せてから乗つた。

工藤さんはすぐに俺達が乗つてきた後ろの扉を閉めて運転席に行つた。

そしてエンジンをかけると

「掴まつてろ！」

と言つてアクセルを思い切り踏んだ。ちょっと待つて！何に掴まればいいんだ！？俺は思い切り扉に背中を打ち付けた。うう、不幸だ。そして俺達は警察署を後にした。

第13話 現実でタイント系の奴が現れたら高確率で死ぬ（後書き）

御意見、御感想等お待ちしています。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9234x/>

日常が消えたこの世界

2011年12月20日23時46分発行